始

323
614

SANSKRIT GRAMMAR

by

Ama-Tokuzyu

梵語文法綱要

阿滿得壽

Kyôto;

At the Issei-Dô press.

323-614

梵語文法綱要刊行の辭

（附言梵語の名義）

近い頃專門學校とは云はず大學と云はず梵語學の研鑽は盛んに行はれてゐる最近では光壽會が設立されて原典の和譯が出るやうになつて學界を裨益してゐることは喜ばしき現象である印度學を修めんとするには原典を通讀し得る素養がなくてはならぬそれには巴利語も西藏語も梵語も修得せねばならぬこれ等に關する著書は少なくはないが多くは歐文で書かれてゐるから初學者の理解は容易でない茲に全然梵語の豫備的智識のない初學者のために早く梵語を理解できるやうに本書を綴づることにしたもとより文法の大綱を述べたに過ぎないから充分でない幸にもこの書を階梯として進み得るならば幸甚である。

梵語の名義　印度の國初に大梵天王が一百萬頃

の聲明を造るこ云ふ古說に據つて印度國を梵土こ云ひその國語を梵語こ云ひその文章を梵文こ云ひ來つた即ち梵天 Bhahman の男性單數主格の形 Brahmā を唐土で音譯して梵藍賀摩こ云つてゐるその第一音の梵の字を取り來つてその國語の冠詞こして梵語こ云ひ來つたのである現代一般に梵語の總名を散斯克栗多又は散斯克の音譯字を用ゐる原語 Sanskṛit こ書くがこれは Sanskṛita こ綴るべき語で適當又は完全に造作せられたるものこ云ふがこの語の原義であるそれ故に各種の言語の中で尤も完全なるものこするこ云ふやうな說を後世に云ひ傳ふるに至つた元來上に述べたやうに完全に造作せられたものこ云ふ原義から清淨なる又は神聖なるこ云ふ意義が附加せられ清淨にされたる器や正しく飾られたる犧牲や入門の儀式を卒へた人を Sanskṛita こ云つてゐる。

大正十四年五月　　著者識す

目　次

內　容

頁

I. 梵語の字母……1

II. 語　音……1—4

III. 發　音……4—5

IV. 連聲法……6—17

V. まげ……18

VI. 名詞の性……18

VII. 格……18—19

VIII. 數及び格の意義……19—20

IX. 名詞的變化に於ける原則上の轉尾……21—23

X. 名詞はその語基の終りから七種類に分つことができる……24—38

XI. 形容詞……39—40

XII. 數　詞……41—45

XIII. 代名詞……45—53

XIV. 動詞の相時稱法語尾數人稱分詞獨立格及び屬格活用語尾分類表……54—65

XV. 原始動詞十種活用の能相語基構成の解說…… 66—71
XVI. 轉來動詞能相現在語基…… 72—74
XVII. 現在語基以外の語基構成の解說…… 74—83
XVIII. 原始十種動詞及び轉來動詞所相語基構成の解說 84—95
原始能相動詞十種活用表…… (1)—(8)
同　所相十種活用表…… (9)—(11)
使役法求欲法强意法分詞表……(12)—(13)
十種動詞活用の例…… 97—123
XIX. 復合語(六合釋)……124—131
XX. 接　頭　辭……131—132
XXI. 不　轉　語……132—133

梵語文法綱要

第一部　第一編

音　論

I. 梵語の字母

§1. 梵語の字母は通常四十九である今之を記すに梵字の代りに羅甸文字を借りて書くことゝする。

a(ア) ā(アー) i(イ) ī(イー) u(ウ) ū(ウー)
ṛi(リ) ṛī(リー) ḷi(リ) ḷī(リー)
e(エー) ai(アイ) o(オー) au(アウ)
k(ク) kh(クフ) g(グ) gh(グフ) ṅ(ング)
c(チュ) ch(チュフ) j(ヂュ) jh(ヂュフ) ñ(ニュ)
ṭ(ド) ṭh(ドフ) ḍ(ド) ḍh(ドフ) ṇ(ヌ)
t(ト) th(トフ) d(ド) dh(ドフ) n(ヌ)
p(プ) ph(プフ) b(ブ) bh(ブフ) m(ム)
y(イ) r(ル) l(ル) v(ヴ) ś(シュ)
ṣ(ス) s(ス) h(フ) ṁ(ン) ḥ(フ)

II. 語　音

§2. 梵語字母による語音は他國語に於てする如く母音と

父音とに分ける。

A. 母　　音

1. 短母音: *a, i, u, ṛi, ḷi.*

2. 長母音: *ā, ī, ū, ṛī, ḷī, e, ai, o, au.*

又母音を別ちて單復二種と平音重音復重音の三種とする。

1. 單母音: *a, ā, i, ī, u, ū, ṛi, ṛī, ḷi, ḷī.*

2. 複母音: *e, ai, o, au.*

3. 平　音: *a ā　i ī　u ū　ṛi ṛī　ḷi.*
   重　音: *a ā　e　o　ar(ra)　al(la)*
   複重音: *ā　ai　au　ār　āl*

B. 父　　音

k-vargāḥ. *k, kh, g, gh, ṅ.*

c-vargāḥ. *c, ch, j, jh, ñ.*

ṭ-vargāḥ. *ṭ, ṭh, ḍ, ḍh, ṇ.*

t-vargāḥ. *t, th, d, dh, n.*

p-vargāḥ. *p, ph, b, bh, m.*

半母音 (antaḥ-sthāḥ) *y, r, l, v.* (父母と母音の間に立つて半母音の用をなす)

吹氣音 (uṣman) *ç, ṣ, s, h.* (時ありては *ṁ, ḥ* をも含む)

空　點 (anuṣvāraḥ) *ṁ* (母音に隨ふて生ずる音)

涅槃點 (visargaḥ) *ḥ* (止聲)

§3. 凡ての字母を聞えに從つて分けた別け方と主な發音器官に從つて分けた別け方。

閉音						開音				
	硬音		軟音			硬音	軟音			
	無氣	含氣	無氣	含氣	鼻音	摩擦音	母音			
喉音	k	kh	g	gh	ṅ	ç	h	a ā	e	o
顎音	c	ch	j	jh	ñ		y	i ī	ai	
舌音	ṭ	ṭh	ḍ	ḍh	ṇ	ṣ	r	ṛi ṛī		au
齒音	t	th	d	dh	n	s	l	ḷi		
唇音	p	ph	b	bh	m		v	u ū		

(註) 閉音とは sparçāḥ (聲音機關の接觸より生ずる音) と云つて聲音機關の活動によつて氣息は外に出づるをさえぎられて發する時の音を云ふ k, c, ṭ, t, p, 等は之に屬す。

開音とは vivṛitāḥ (聲音機關にさえぎられずして開かれて發する音) と云つて之に三種がある。

1. īṣat-spṛiṣṭāḥ (聲音機關の少く相觸れたる) と云つて y, r, l, v は之に屬す。

2. īṣaḍ-vivṛitāḥ (聲音機關の少く開きたる) と云つて吹氣音と稱する ç, ṣ, s, h は之に屬す。

以上の二種は或は機關に摩擦して發する音であるから此等を摩擦音とも云はれる。

3. vivṛitāḥ（聲音幾關が開かれたる）と云つて全然閉塞せられずして發する音で母音は之に屬す。

硬音とは aghoṣa-vantaḥ（聲帶の顫動を要せずして發生する音）と云つて k, kh, c, ch. 等之に屬す。

軟音とは ghoṣa-vantaḥ（聲帶顫動して生ずる音）と云つて母音と濁音鼻音が之に屬す。

含氣音とは mahāprāṇāḥ（多く氣息を有する）と云つてkh, gh, th, dh. 等之に屬す。

無氣音とは alpaprāṇāḥ（少しく氣息ある音）と云つてk, g, t, d. 等之に屬す。

鼻音とは nāsikya（氣息が鼻腔を通過して發する音）と云つて ṅ, ñ, n. 等之に屬す。

III. 發　音

§4. 母音: 母音中 *a* より *ū* に至る迄は國音のア，アー，イ，イー，ウ，ウーと比べて大差がない。

ṛi, ṛī, ḷi, ḷī は國音のラ行とは全くその性質を異にしてゐる英語の *r, l* に *i, ī* を加へてリ，リー等と發音すれば大差がない

e, o はエー，オーと長く發音する。

ai, au も *e, o* の如く長くアーイ，アーウと發音する。

§5. 父音 *c* はチュ *ch* は チュフ と發音する之に *a* を加へて發音すれば *ca* チヤ *cha* チユハとなる。

ṭ は舌音で舌端を上顎の中央部にあてドと發音する之に *a* を加へて *ṭa* ダ *ṭha* ドハ等と發音する。

t は齒音で舌端を齒にあてトと發音する之に *a* を加へて *ta* タとなる。

p 等は唇音で上下の唇の閉じたまゝブと云つて氣息を出す之に *a* を加へて口を開きパと發音する。

ç, ṣ は舌端を上顎の中央部に近づけてスと發音する之に *a* を加へて *ça* シヤ，*ṣa* ザとなる。

ṅ は英語の kingdom の *ng* ングの發音に類似してゐる。

ñ は國音の般若のニヤの鼻音に似てゐる。

ṇ は *ṭ* と同じところに舌端を移してヌと發音する。

n は國語のヌと同音である。

m は國音のムである。

ṁ は國音のンである。

ḥ は國音フに稍似てゐる。

IV. 連　聲　法

A. 母音の變化

§6. 語尾 *a* 又は *ā* の場合。

+a=ā | +ā=ā | +i=e | +ī=e | +u=o |

+ū=o | +ṛi=ar | +ṛī=ar | +e=ai | +ai=ai |

+o=au | +au=au |

〔例〕 n*a*+*a*sti=n*ā*sti. かれはあらぬ

jīv*ā*+*a*nta=jīv*ā*nta. 生命の終

day*ā*+*ā*rdra=day*ā*rd*a*. 同情に潤へる

tav*a*+*i*cchā=tav*e*cchā. 汝の希望

par*a*+*ī*çvara=param*e*çvara. 至高自在天

hit*a*+*u*padeça=hit*o*padeça. 裨益ある訓誡

gaṅg*ā*+*u*daka=gaṅg*o*daka. 恒河の水

tav*a*+*ṛi*ddhi=tav*ar*ddhi. 汝の神通力

mah*ā*+*ṛi*ṣi=mah*ar*ṣi. 大仙人

par*a*+*e*dhita=par*ai*dhita. 他の者に養育されて

vidy*ā*+*e*va=vidy*ai*va. 學識こそ

dev*a*+*ai*çvarya=dev*ai*çvarya. 神の主權

alp*a*+*o*jas=alp*au*jas. 少さき力

gaṅg*ā*+*o*gha=gaṅg*au*gha. 恒河の洪水

jvar*a*+*au*ṣadha=jv*ar au*ṣadha. 熱病の醫藥、等。

§7. 語尾 *i* 又は *ī* の場合。

（以下は一々例を擧ぐることを略した）

+i=ī | +ī=ī | +a=ya | +ā=yā | +*u*=yu |

+ū=yū | +ṛi=yṛi | +ṛī=yṛī | +e=ye | +ai=yai |

+o=yo | +au=yau |

〔例〕 adh*i*+*ī*çvara=adh*ī*çvara. 至高の神

agn*i*+*a*stra=agn*ya*stra. 火の武器

prat*i*+*u*vāca=prat*yu*vāca. 彼は對へた、等。

§8. 語尾 *u* 又は *ū* の場合。

+u=ū | +ū=ū | +a=va | +ā=vā | +i=vi |

+ī=vī | +ṛi=vṛi | +ṛī=vṛī | +e=ve | +ai=vai |

+o=vo | +au=vau |

〔例〕 ṛit*u*+*u*tsava=ṛit*ū*tsava. 祭禮の季節

tu+*i*dānīm=t*vi*dānīm. 然し今、等。

§9. 語尾 *ṛi* 又は *ṛī* の場合。

+ṛi=ṛī | +ṛī=ṛī | +a=ra | +ā=rā | +i=ri |

+ī=rī | +u=ru | +ū=rū | +e=re | +ai=rai |

+o=ro | +au=rau |

〔例〕 pitṛ*i*+ṛ*i*ddhi=pitṛ*ī*ddhi. 父の成功

mātṛ*i*+*ā*nanda=mātṛ*ā*nanda. 母の歡喜、等。

§10. 語尾 *e* の場合。

+e=ae | +e=aye | +a=e' | +ā=aā | +ā=ayā |

+i=ai 又は ayi | +ī=aī 又は ayī | +u=au 又は ayu |

+ū=aū 又は ayū | +ṛi=aṛi 又は ayṛi | +ṛī=aṛī 又は ayṛī |

+ai=aai 又は ayai | +o=ao 又は ayo | +au=aau 又は ayau |

〔例〕 t*e*+*a*pi=t*e*'pi. 彼等も亦

t*e*+*ā*gatāḥ=t*ay*ā*g*atāḥ=t*aā*gatāḥ. 彼等は來た

j*e*+*a*ti=jayati. 彼は勝利す

agn*e*+*e*=agn*aye*. 火のために

〔註〕 轉尾及び活用法の兩數の語尾 ī, ū, e 及び adas, (その, この) の復數 amī の ī は他の母音の前には變化せぬ又かゝる e の後の a も略さぬ。

〔例〕 dādatale ubhe. 兩足蹠; cakṣuṣī ime. この兩眼; bāhū udyamya. 兩臂を擧げて; kuṇḍle avamucya. 兩耳環を取りて。

§11. 語尾 *ai* の場合。

+a*i*=āyai | +a=āya | +ā=āyā | +i=āyi | +ī=āyī |

+u=āyu | +ū=āyū | +ṛi=āyṛi | +ṛī=āyṛī | +e=āye |

+o=āyo | +au=āyau |

〔例〕 kasm*ai*+*a*pi=kasm*ā*y*a*pi. 誰のためにも

ra*i*+*a*ḥ=r*ā*y*a*ḥ. 諸の財物、等。

§12. 語尾 *o* の場合。

+o=avo | +a=o' | +a=ava | +ā=avā | +i=avai |

+ī=avī | +u=avu | +ū=avū | +ṛi=avṛi | +ṛī=avṛī |

+e=ave | +ai=avai | +au=avau |

〔例〕 s*o*+*a*pi=s*o*'pi. かれも亦

bh*o*+*a*ti=bh*av*ati. かれはある

g*o*+*ī*çvara=g*av*īçvara. 牛の所有者

g*o*+*o*kas=g*av*okas. 牛の住所、等。

§13. 語尾 *au* の場合。

+au=āvau | +a=āva | +a=āvā | +i=āvi | +ī=āvī |

+u=āvu | +ū=āvū | +ṛi=avṛi | +ṛī=āvṛī | +e=āve |

+ai=āvai | +o=āvo |

〔例〕 dad*au*+*a*nnam=dad*ā*v*a*nnam. かれは食物を與へた

n*au*+*au*=n*ā*v*au*. 二艘船、等。

B. 父音の變化

父音の中で *k, ṭ, t, p, ñ, ñ. n, m, ḥ,* の外は語尾に立つことができぬ。

この他の父音若し語尾に來らばその父音の一にあらためばならぬ。

又 *c, ch, j, jh* 及び *ç* が語尾に來らば *k* となる。*j, ç* は時ありては *ṭ* となる又 *ṣ* と *h* は *ṭ* 又は *k* となる。

〔例〕 jal*ā*d=jal*ā*t. 水より vir*udh*. 蔓草の單主は vir*ut*. ṛic. 梨倶の讃誦の單主は ṛic*s*=ṛi*k*. sra*j*. 鬘の單主 sra*k*. di*ç*. 方處の單主 di*k*. vaṇi*j*. 商賈=vani*k*. dvi*ṣ*. 仇敵=dvi*ṭ*. tṛi*ṣ*. 渴=tṛi*ṭ*. madhu-li*h* 蜜を嘗むるもの=madhu-li*ṭ*.

又語根語基の終りにある軟音の含氣音は硬音に會するとき硬音の無氣音となる。

此時語根の始めにある軟音の無氣音は含氣音となる。

〔例〕 artha—bu*dh*+*s*. 意義を解する=artha—bhu*t*.

da*dh*+*te*. かれはおく=dha*tte*. da*dh*+*se*. 汝はおく=dh*tse*.

又語根語基の終りにある軟音の含氣音が *t, th* に會するときは軟音の含氣音は自己と同種類の無氣音となり *t, th* は *dh* となる。

〔例〕 bu*dh*+*ta*=bu*ddha*. 覺れるもの bu*dh*+*tv*ā=bu*ddh*vā. 覺りて。

§14. 語尾 *k* 又は *g* の場合。

+a=ga | +ā(1)=gā | +i(1)=gi | +k=kk | +g=gg | +c=kc | +j=gj | +t=kt | +d=gd | +n=ṅn | +p=kp | +b=gb | +m=ṅm | +y=gy | +r=gr | +l=gl | +v=gv | +ç=kç | +s=ks | +h=ggh |

〔例〕 vā*k*+devī=vā*g*devī. 雄辯の女神

vā*k*+īça=vā*g*īça. 言葉の主

vā*k*+*m*aya=vā*ñ*maya. 言葉充分に、等。

§15. 語尾 *t* 又は *d* の場合。

+a=da | +ā(1)=*d*ā | +i(1)=di | +k=tk | +g=dg | +c=cc | +j=jj | +t=tt | +d=dd | +n=nn | +p=tp | +b=db | +m=nm | +y=dy | +r=dr | +l=ll | +v=dv | +ç=cch | +s=ts | +h=ddh |

〔例〕 vanā*t*+ca=vanā*cca*. そして森より

ta*t*+*n*etram=ta*nn*etram. その目

ta*t*+*m*ātram=ta*nm*ātram. その分量

kum*d*+*s*u=kumu*ts*u. 諸の蓮花に

maru*t*+*v*āti=maru*dv*āti. 風が吹く

dṛiça*d*+*p*ata*n*a=dṛiça*tp*atana. 石の墜落

bhayā*t*+*l*obhāt+ca=*b*hayā*ll*obhācca. 恐怖と慾食より

ta*d*+*j*īvanam=ta*jj*īvanam. その活計

ta*t*+*ç*rutvā=ta*cch*rutvā. それを聞きて

ta*t*+*h*arati=ta*ddh*arati. かれはそれを奪ふ、等。

(1) ā, i 又は他の母音が格の語尾なる時は硬父音の k 及び t はその韻に變化せぬ。

§16. 語尾 *n* の場合。

+a=nna(1) | +ā=nnā | +i=nni(1) | +k=nk | +g=ng |

+c=ṁçc | +j=ñj(2) | +t=ṁst | +d=nd | +n=nn | +p=np |

+b=nb | +m=nm | +y=ny | +r=nr | +l=ṁll(3) | +v=nv |

+ç=ṁç(2) 又は ñch | +s=ns | +h=nh |

〔例〕 āsa*n*+*a*tra=āsa*nna*tra. 彼等は彼處にあつた

kasmi*n*+cit=kasmi*ṁç*cit. 或る人に

asmi*n*+*t*aḍāge=asmi*ṁst*aḍāge. この水溜に於て

pakṣā*n*+*l*unāti=pakṣā*ṁll*unāti. 彼は翼を切る、等。

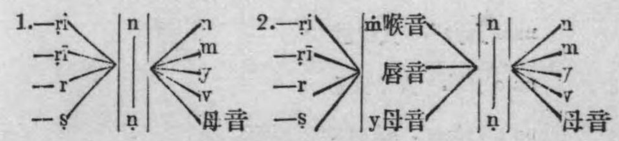
(1) n が短母音に先き立つときは二重となる。

(2) j 及び ç の前の n は之に相應する鼻音に變ぜらる。

(3) n は l の前に ṁl となる。

又一語中のに於て母音 *n, m, y, v* の前にある齒音の *n* が舌音の *ṇ* となる場合に二種ある。

1. *n* が一語の中に於て直に *ṛi, ṛī, r, ṝ* の後に來るとき。
2. *n* が一語の中に於て母音、喉音、唇音、*ṁ, y* を介して *ṛi, ṛī, r, ṝ* の後に來るとき。



〔例〕 parṇaghut. 葉にて掩ひて ṣaṇmāsān. 六月を ṛiṇa. 罪を負へる mitreṇa. 友と共に gṛiheṇa. 家と共に brāhmaṇa. 婆羅門 puṣpāṇi. 諸の花は、等。

§17. 語尾 *as* の場合。

+a=o' | +ā=aā | +i=ai | +k=aḥk | +g=og | +c=açc |

+j=oj | +t=aṣt | +d=od | +n=on | +p=aḥp | +b=ob |

+m=om | +y=oy | +r=or | +l=ol | +v=ov | +ç=aḥç |

+s=aḥs | +h=oh |

〔例〕 終りの *s* の存する場合

naras *t*arati. 人は逃る

naras *s*arati. 人は往く、等。

終りの *s* が *ḥ* (*visargaḥ*) になる場合

naraḥ *k*aroti. 人は作爲す

naraḥ *p*acati. 人は料理す

naraḥ *ç*ocati. 人は愁傷す、等。

as の o となる場合

naro *g*acchati. 人は往く

naro *j*ayati. 人は勝つ

naro *y*āti. 人は到る

naro *r*akṣati. 人は守る、等。

終りの *s* の除かれる場合

nara āyāti. 人は來る

nara īkṣate. 人は觀察す

açva iva. 馬は……の如く、等。

(註) 一語の終りにある *as* は次に來る語の始にある軟父音に會ふて *o* となる。
又 *a* に會ふときは *o* となりて *a* は消え ' (apostrophe) の記號を附す。又 *a* 以外の母音に會ふて除かる。

〔例〕 sūdas+annam=sūdo'nnam. 料理人は食物を

candras+iva=candra iva 月は……の如く

§18. 語尾 *ās* の場合。

+*a*=āa | +ā=āā | +i=āi | +k=āḥk | +g=āg | +c=āçc |
+j=āj | +t=āst | +d=ād | +n=ān | +p=āḥp | +b=āb |
+m=ām | +y=āy | +r=ār | +l=āl | +v=āv | +ç=āḥç |
+s=āḥs | +h=āh |

〔例〕 narā *a*dant. 人々は食す

narā *g*acchanti. 人々は往く

narāḥ *k*uruvanti. 人々は作爲す

narāḥ *p*acanti. 人々は料理す

narāḥ *ç*ocanti. 人々は愁傷す

narāḥ *s*aranti. 人々は往く、等。

(註) 一語の終りにある *ās* は次に來る語の始にある軟音に會ふて *s* は消える。

§19. 語尾 *r* の場合。

a 又は ā 以外の母音に次ぐとき

+a=ra | +ā=rā | +i=ri | +k=ḥk | +g=rg | +c=çc |
+j=rj | +t=st | +d=rd | +n=rn | +p=ḥp | +b=rb |

+m=rm | +y=ry | +r=r[4] | +l=rl | +v=rv | +ç=ḥç |

+s=ḥs | +h=rh |

〔例〕 sudair annam. 料理人によりて食物は

naur āyāti. 船は來る

mitrair gṛihāt. 友人等と共に家より、等。

(4) 語尾の *r* は消滅何んとならば *r* は決して重ならぬ而してその前に來る短母音は長くなる。

〔例〕 nis+ruj=nīruj. 無病の

（註） is, īs, us, ūs 等凡て a, ā 以外の母音に次ぐ *s* は軟音に會ふて *r* となる。

一語の中にある *s* が *ṣ* となる場合に二種ある。

1. 直に a, ā 以外の母音若くは k, l, r の後に來るとき。
2. ṁ 及び ḥ を介して a, ā 以外の母音若くは k, l, r の後に來るとき。

gṛiheṣu. 諸の家に於て

madhuṣu. 諸の蜜に

vāriṣu. 諸の水に

dikṣu. 諸の方處に於て、等。

§20. 語尾 *r* の場合。

（母音に次ぐとき）

+a=ra | +ā=rā | +i=ri | +k=ḥk | +g=rg |

+c=çc | +j=rj | +t=st | +d=rd | n=rn |

+p=ḥp | +b=rb | +m=rm | +y=ry | +r=r[4] |

+l=rl | +v=rv | +ç=ḥç | +s=ḥs | +h=rh |

〔例〕 prātar+kāla=prātaḥkāla. 朝の時

prātar+snāna=Prātaḥsnāna. 朝の沐浴

prātar+tu=prātastu. 又翌朝

prātar+āça=prātarāça. 朝の食物

nir+rasa=nīrasa. 風味なき、等。

一語の終りにある *s* 及び *r* が *ḥ* (*visargaḥ*) となる場合に三種がある。

1. 一文の終りにあるとき

nṛipasya rathāḥ. 王の諸車は

2. 獨立して存在するとき

mṛigāḥ. 諸鹿は dhanaiḥ. 諸の財物を以て

3. 次に來る語の始にある *k, kh, p, ph, ç, ṣ, s.* に會するとき

sūdaḥ khagam. 料理人は鳥を

punaḥ punaḥ. またまた、等。

第一部　第二編

性數格轉尾形容詞數詞代名詞

V. まけ

§21. まけとは或る詞が一定の關係を示すために起す變化を云ふ。

名詞代名詞形容詞等のまけを轉尾と云ひ動詞のまけを活用と云ふ。

VI. 名詞の性

§22. 梵語の性(liṅga)に男性(puṁl-liṅga) 女性(strī-liṅga) 中性(klība liṅga)の三種ある。

梵語の性は必しも實際上の性と一致するものでない婦の義ある dāra は男性で kalatra は中性で bhāryā は女性である。

VII. 格（名詞、代名詞、形容詞、數詞）

§23. 梵語の名詞代名詞形容詞數詞には大低（複合語は別である）格(vibhakti)と云ふ形があつて語と語の關係を示してゐる。

梵語の名詞等には次の八格がある。

1. 主　格 (kartṛi)　　2. 呼　格 (saṁbuddhi)
3. 對　格 (karma)　　4. 具　格 (karaṇa)
5. 與　格 (saṁpradāna)　　6. 奪　格 (apādāna)
7. 屬　格 (saṁbandha)　　8. 於　格 (adhikaraṇa)

VIII. 數（名詞，代名詞，形容詞）

§24. 梵語の名詞等には三種の數 (vacana) がある。

1. 單　數 (eka-vacana) 一人或は一個を示す。
2. 兩　數 (dvi-vacana) 二人或は二個を示す。
3. 復　數 (bahu-vacana) 三人或は三個以上を示す。

§25. 格の意義。

1. 主格は古來體聲と云れて直に體のとるべき格で「人は來る」「花が咲く」の場合の「人は」「花が」と云ふ時の【は】【が】にて譯す。

2. 呼格は人或は事物が呼びかけられることを示す格で「友よ」と云ふ時の【よ】の辭で譯す。

3. 對格は古來業聲と云はれて人或は事物が動作の目的即ち客體となつてゐることを示す格で「人を打つ」「都に往く」と云ふ時の【を】【に】の辭で譯す。

4. 具格は人或は事物が或るものゝために作具となること

を示す格で「馬にて往く」「彼によりて殺さる」と云ふ時の【にて】【によりて】の辭で譯す。

5. 與格は古來爲聲と云はれてゐる即ち人或は事物に又はそのために或る事が存し或は爲される等の關係を示す格で「人に物を與ふ」「救助せん爲に」と云ふ時の【に】【爲に】の辭で譯す。

6. 奪格は古來從聲と云ふ即ち人或は事物が或るものより分離することを示す格で「家より追放せられた」と云ふ時の【より】の辭で譯す。

7. 屬格は所有所屬等名詞の形容詞的關係を示す格で「予の家を出る」と云ふ時の【の】の辭で譯す。

8. 於格は動作のあつた所卽ち位置を示す格で「父が內にゐる」「家に於て」と云ふ時の【に】【於て】の辭で譯す。

§26. 一語の要素。

一語の成分を分解すると第一は語根 (prakṛiti 或は dhātu) 即ち根本の義で man, '思惟する' の如きである。

第二は語基構成音 (Pratyaya) と云つて語根 man＋*as*＝manas, '意' の *as* の如きである即ち語根に語基構成音の加はつたものが語基である。

第三は語尾 (vibhakti) と云つて語基 manas＋ā＝manasā, '心を以て' の ā の如きを云ふ。

第四は接頭詞 (upasarga 又は gati) と云つて語根語基の前に置かれるもの *dur*-jana, '惡人'; *pari*-tuṣ, '悅ぶ' の *dur* 又は *pari* の如きものを云ふ。

IX. 名詞的變化に於ける原則上の轉尾

§27. 次の轉尾は凡ての名詞の語基に適用する。

	單數	兩數	復數
主格	*s*	*au* (中性 *i*)	*as* (中性 *i*)
對格	*am*	*au* 〃	*as* 〃
具格	*ā*	*bhyām*	*bhis*
與格	*e*	〃	*bhyas*
奪格	*as*	〃	〃
屬格	〃	*os*	*ām*
於格	i	〃	*su*

(註) 呼格は主格の異形であるけれども常に兩數復數に於ては主格と符合するが故に上の原則に揭ぐることを略した單數に於ては時としては語基に時としては主格に同じで又時としては兩方から異つてゐる。

§28. *Nau* (艀) の轉尾は正しく上の轉尾が用ゐられる。

單　　數	兩　數	復　數
主、呼 naus nau+*s*	nāv*au* nau+a*u*	nāv*as* nau+as
對 nāv*am* nau+am	nāv*au* nau+au	nāv*as* nau+as
具 nāv*ā* nau+*ā*	nau*bhyām* nau+bhyām	nau*bhis* nau+bhis
與 nāv*e* nau+e	nau*bhyām* nau+bhyām	nau*bhyas* nau+bhyas
奪 nāv*as* nau+as	nau*bhyām* nau+bhyām	nau*bhyas* nau+bhyas
屬 nāv*as* nau+as	nāv*os* nau+os	nāv*ām* nau+ām
於 nāv*i* nau+i	nāv*os* nau+os	nau*ṣu* nau+su

（注意） 一語の終りにある m は次の語の始にある父音に會して *ṁ* (anusvāraḥ) となる。

〔例〕 nāvā*m*+*d*ānāni=nāvā*ṁ* dānāni. 諸船の施與は。

§29. 名詞の種類によつて異つた轉尾をとる。

單　數

主　s (男, 女), m°(中)
對　am (男, 女) m°(男, 女, 中)
具　ā (男, 女, 中), ina°(男, 中)
與　e (男, 女, 中), ya°(男, 中)
奪　as (男, 女, 中), s, r (男, 女), t°(男, 中)
屬　as (男, 女, 中), s, r (男, 女), sya°(男, 中)
於　i (男, 女, 中), ām°(女), au (男, 女)

兩　數

主　au (男, 女), ī (中)
對　au (男, 女), ī (中)
具　bhyām (男, 女, 中)
與　〃　(〃)
奪　〃　(〃)
屬　os　(〃)
於　os　(〃)

復　數

主　as (男, 女) i (中)
對　as, s (〃), n°(男), i (中)
具　bhis (男, 女, 中), ais° (男, 中)
與　bhyas　(〃)
奪　〃　(〃)
屬　ām　(〃)
於　su　(〃)

（註） 上の表で ° の標を付けたものは大概次に掲げる轉尾の第一種類に限られる。

X. 名詞はその語基の終りから七種類に分つことができる

A. 母音語基の名詞的轉尾

§30. 第一種類 *a* に終る男性語基の轉尾。

çiva, '濕婆神'

主	çiva*s*	çiva*u*	çivā*s*
呼	çiva	çiva*u*	çivā*s*
對	çiva*m*	çiva*u*	çivā*n*
具	çiva*na*	çivā*bhyām*	çiva*is*
與	çivā*ya*	〃	çiva*ebhyas*
奪	çivā*t*	〃	〃
屬	çiva*sya*	çiva*yos*	çivā*nām*
於	çiva*e*	〃	çiva*eṣu*

§31. 第一種類 *a* に終る中性語基の轉尾。

主	çiva*m*	çiva*e*	çivā*ni*
呼	çiva	〃	〃
對	çiva*m*	〃	〃

餘の格の轉尾は男性と同じである

§32. 第一種類 *ā* に終る女性語基の轉尾。

çivā, '濕婆神の妻'

主	çivā	çiva*e*	çivā*s*
呼	çiva*e*	〃	〃
對	çivā*m*	〃	〃
具	çiva*yā*	çivā*bhyām*	çivā*bhis*
與	çivā*yai*	〃	çivā*bhyas*
奪	çivā*yās*	〃	〃
屬	çivā*yās*	çiva*yos*	çivā*nām*
於	çivā*yām*	〃	çivā*su*

§33. 第一種類 *ī* に終る女性語基の轉尾。

nadī, '河'

主	nadī	nad*yau*	nad*yas*
呼	nad*i*	〃	〃
對	nadī*m*	〃	nadī*s*
具	nad*yā*	nadī*bhyām*	nadī*bhis*
與	nad*yai*	〃	nadī*bhyas*
奪	nad*yās*	〃	〃
屬	〃	nad*yos*	nadī*nām*
於	nad*yām*	〃	nadī*ṣu*

§34. 第二種類 *i* に終る男性語基の轉尾。

kavi, '詩人'

主	kavis	kavī	kavayas
呼	kave	”	”
對	kavim	”	kavīn
具	kavinā	kavibhyām	kavibhis
與	kavaye	”	kavibhyas
奪	kaves	”	”
屬	”	kavyos	kavīnām
於	kavau	”	kaviṣu

§35. 第二種類 *i* に終る女性語基の轉尾。

mati, ‘智慧’

主	matis	matī	matayas
呼	mate	”	”
對	matim	”	matīs
具	matyā	matibhyām	matibhis
與	mataye, matyai	”	matibhyas
奪	mates, matyās	”	”
屬	” ”	matyos	matīnām
於	matau, matyām	”	matiṣu

§36. 第二種類 *i* に終る中性語基の轉尾。

vāri, ‘水’

主	vāri	vāriṇī	vāriṇi
呼	vāri, vāre	”	”
對	vāri	”	”

具	vāriṇā	vāribhyām	vāribhis
與	vāriṇe	”	vāribhyas
奪	vāriṇas	”	”
屬	”	vāriṇos	vāriṇām
於	vāriṇi	”	vāriṣu

§37. 第三種類 *u* に終る男性語基の轉尾。

guru, ‘師父’

主	gurus	gurū	guravas
呼	guro	”	”
對	gurum	”	gurūn
具	guruṇā	gurubhyām	gurubhis
與	gurave	”	gurubhyas
奪	guros	”	”
屬	”	gurvos	gurūṇām
於	gurau	”	guruṣu

§38. 第三種類 *u* に終る女性語基の轉尾。

dhenu, ‘牝牛’

主	dhenus	dhenū	dhenavas
呼	dheno	”	”
對	dhenum	”	dhenūs
具	dhenvā	dhenubhyām	dhenubhis
與	dhenave, dhenvai	”	dhenubhyas
奪	dhenos, dhenvās	”	”

屬	dhen*os*,dhen*vās*	dhen*vos*	dhen*ūnām*
於	dhen*au*	”	dhen*uṣu*

（註） *vadhū*（妻）の如く ū に終る女性語基の轉尾は單數主格 *vadhūs* を除いて §33 の *nadī* の轉尾に同じである。

例：兩數の主格は *vadhvau* で復數の主格は *vadhvas* である。

§39. 第三種類 *u* に終る中性語基の轉尾。

madhu, ‘蜜’

主	madh*u*	madhu*nī*	madh*ūni*
呼	madh*u*, madh*o*	”	”
對	madhu	”	”
具	madhu*nā*	madhu*bhyām*	madhu*bhis*
與	madhu*ne*	”	madhu*bhyas*
奪	madhu*nas*	”	”
屬	”	madhu*nos*	madh*ūnām*
於	madhu*ni*	”	madhu*ṣu*

§40. 第四種類 *ṛi* に終る語基の轉尾。

動作名詞（nouns of agency）の代表である *dātṛi*, ‘施與者’ と親族の關係を表示する親族名詞（nouns of relationship）の代表である *pitṛi*, ‘父’ の轉尾。

dātṛi, ‘施與者’

主	dāt*ā* dātā(rs除去)	dāt*ārau* dātār+au	dāt*āras* dātār+as

呼	dāt*ar*	dāt*ārau* dātār+au	dāt*āras* dātār+as
對	dāt*āram* dātār+am	” ”	dāt*ṛīn* dātṛī+n
具	dāt*rā* dātṛi+ā	dāt*ṛibhyām* dātṛi+bhyām	dāt*ṛibhis* dātṛi+bhis
與	dāt*re* dātṛi+e	” ”	dāt*ṛibhyas* dātṛi+bhyas
奪	dāt*ur* dātur(s除去)	” ”	” ”
屬	” ”	dāt*ros* dātṛi+os	dāt*ṛīṇām* dātṛī+n+ām
於	dāt*ari* dātar+i	” ”	dāt*ṛiṣu* dā+ṛi+su

pitṛi, ‘父’

主	pit*ā* pitā(rs除去)	pit*arau* pitar+au	pit*aras* pitar+as
呼	pit*ar*	” ”	” ”
對	pit*aram* pitar+am	” ”	pit*ṛīn* pitṛī+n
具	pit*rā* pitṛi+ā	pit*ṛibhyām* pitṛi+bhyām	pit*ṛibhis* pitṛi+bhis
與	pit*re* pitṛi+e	” ”	pit*ṛibhyas* pitṛi+bhyas
奪	pit*ur* pitur(s除去)	” ”	” ”

屬	pitur pitur(s除去)	pitros pitṛi+os	pitṛīṇām pitṛī+n+ām
於	pitari pitar+i	〃 〃	pitṛiṣu pitṛi+su

（註） *dātṛi* の如き名詞の語尾の *ṛi* は復重音にされる *pitṛi* の如きものは *ṛi* は單、兩、復の三數の主格と單、兩二數の對格に於て重音となるされど單數の主格ではその復重音の *ār* の *r* と重音の *ar* の *r* とは除去される而して重音の *ar* の *r* が取れた殘りの *a* は *ā* と長くなる。

單數の呼、於兩格では *dātṛi* も *pitṛi* も共に重音となる而して奪、屬の兩格は原則上の轉尾の *as* に代はるに *ur* となる。

復數の對、屬の兩格では *ṛi* は *ṛi* と長くなり屬格では中間に *n* を取ることゝなる。

女性轉尾は復數の對格は語尾 *s* をとる例へば *mātṛi*, '母'; *svasṛi*, '姉妹' ;*duhitṛi*, '女子', 等の復數の對格は *mātṛīs*; *svasṛīs*; *duhitṛīs* となるが如きである。

中性の轉尾は *vāri*, '水' の轉尾に從ひ *dātṛi dātṛiṇī dātṛīṇi*, 等となる。

§41. 第四種類 *ai*, *o*, *au* に終る語基の轉尾。

これ等の語尾に終る單綴音の名詞は別に種類を分つほど多數でない。

rai, '財產' (男); *go*, '牛' (男,女) *nau*, '船' (女) などの名詞は重に復合語の終りに來る。

〔例〕 *bahurai*, '富める'; *upago*, '牛近く'; *bahunau*, '多くの船を所有する', 等。

rai, '財物 (男)

主	*rās*	*rāyau*	*rāyas*
呼	〃	〃	〃
對	*rāyam*	〃	〃
具	*rāyā*	*rābhyām*	*rābhis*
與	*rāye*	〃	*rābhyas*
奪	*rāyas*	〃	〃
屬	〃	*rāyos*	*rāyām*
於	*rāyi*	〃	*rāsu*

go, '牛' (男, 女)

主	*gaus*	*gavau*	*gāvas*
呼	〃	〃	〃
對	*gām*	〃	*gās*
具	*gavā*	*gobhyām*	*gobhis*
與	*gave*	〃	*gobhyas*
奪	*gos*	〃	〃
屬	〃	*gavos*	*gavām*
於	*gavi*	〃	*goṣu*

nau, '船' の轉尾は §28 の下にあげた。

B. 父音語基の名詞的轉尾

父音語基も通常は原則上の轉尾をとる今之に三種がある。

1. 一樣語基 *marut*, '風' (男); *diç*, '方處' (女); *manas*, '心' (中); *dhanin*, '富人' (男), 等で强中弱の別なく都ての轉尾を

通じて一種の語基を有つてゐるのみ。

2. 二樣語基 *tudat*, '打つもの' (男, 中) なごで *tudant*, *tudat* の强弱二種の語基を有つてゐる。

3. 三樣語基 *rājan*, '王' (男) なごで *rājān*, *rājan*, *rājñ* の强中弱の三種の語基を有つてゐる。

§42. 第五種類一樣語基の轉尾。

A. *marut*, '風' (男)

主、呼	marut	marutau	marutas
對	marutam	”	”
具	marutā	marudbhyām	marudbhis
與	marute	”	marudbhyas
奪	marutas	”	”
屬	”	marutos	marutām
於	maruti	”	marutsu

B. *diç*, '方處' (女)

主、呼	dik	diçau	diças
對	diçam	”	”
具	diçā	digbhyām	digbhis
與	diçe	”	digbhyas
奪	diças	”	”
屬	”	diços	diçām
於	diçi	”	dikṣu

C. *vār*, '水' (中)

主、呼	vār	vārī	vāri
對	”	”	”
具	vārā	vārbhyām	vārbhis
與	vāre	”	vārbhyas
奪	vāras	”	”
屬	”	vāros	vārām
於	vāri	”	vārṣu

D. *manas*, '心' (中)

主、呼	manas	manasī	manaṁsi
對	”	”	”
具	manasā	manobhyām	manobhis
與	manase	”	manobhyas
奪	manasas	”	”
屬	”	manasos	manasām
於	manasi	”	manaḥsu 又は manassu

(**注意**) *is*, *us* に終る中性語基は上の *manas* の轉尾に類同してゐる。

E. *havis*, '乳酪' (中)

主、呼、對	havis	haviṣī	haviṁṣi
具	haviṣā	havirbhyām	havirbhis
與	haviṣe	”	havirbhyas
奪	haviṣas	”	”
屬	”	haviṣos	haviṣām
於	haviṣi	”	haviḥṣu 又は —ṣṣu

F. *cakṣus*, '眼' (中)

主、呼、對	cakṣus	cakṣuṣī	cakṣūṁṣi
具	cakṣuṣā	cakṣurbhyām	cakṣurbhis
與	cakṣuṣe	”	cakṣurbhyas
奪	cakṣuṣas	”	”
屬	”	cakṣuṣos	cakṣuṣām
於	cakṣuṣi	”	cakṣuḥṣu 又は —ṣṣu

G. *dhanin*, '富人' (男, 中)

	男	中	男	中	男	中
主	dhanī	dhani	dhaninau	dhaninī	dhaninas	dhanīni
呼	dhanin	”	”	”	”	”
對	dhaninam	”	”	”	”	”
具	dhaninā		dhanibhyām		dhanibhis	
與	dhanine		”		dhanibhyas	
奪	dhaninas		”		”	
屬	”		dhaninos		dhaninām	
於	dhanini		”		dhaniṣu	

(註) 斯様な動作名詞の女性語基は男性語基に ī を加へて作る。*dhanin* から *dhaninī*, *kārin*, '作爲者' から *kāriṇī* ができる。此等の轉尾は §33 の *nadī* のそれによる。

§43. 第六種類二樣語基の轉尾。

—at, —mat, —vat, —yas 語基の轉尾。

tudat, '打つもの' (男, 中), *tudant* (强) *tudat* (弱)

	男	中	男	中	男	中
主	*tudan*	tudat	*tudantau*	tudatī	tudantas	tudanti
呼	*tudan*	”	*tudantau*	”	*tudantas*	”
對	*tudantam*	”	*tudantau*	”	*tudatas*	”
具	tudatā		tudabhyām		tudadbhis	
與	tudate		”		tudadbhyas	
奪	tudatas		”		”	
屬	”		tudatos		tudatām	
於	tudati		”		tudatsu	

(註)

1. 二樣語基の轉尾の中で强語基をとるものは男性では單、兩、復の三數の主、呼の二格と單、兩二數の對格であつてその他の場合は弱語基をとる。

2. 女性は弱語基に ī を加へて語基を作る tudat に ī を加へ *tudatī*, '打つ女' となる。
轉尾は §33 の nadī の例による。

3. *—mat, —vat* 語基の轉尾は單數男性の主格に於て *mān*, *vān* となる。

例: dhanavat, '財ある' の單、主、は *dhanavān*; bhagavat, '光榮ある, 世尊' の單、主、は *bhagavān*; paçumat, '家畜を有する' の單、主、は *paçmān* となる。
餘の格の轉尾は上の tudat に同じである。

§44. *yas* に終る比較級の二樣語基の轉尾。

çreyas, '一層よき', *çreyāṁs* (强) *çreyas* (弱)

	男	中	男	中	男	中
主	çreyān	çreyas	çreyāṁsau	çreyasī	çreyāṁsas	çreyāṁsi

呼	çreyan çreyas	çreyaṁsau çreyasī	çreyāṁsas çrəyāṁsi
對	çreyāṁsam "	" "	çreyasas "
具	çreyasā	çreyobhyām	çreyobhis
與	çreyase	"	çreyobhyas
奪	çrəyasas	"	"
屬	"	çreyasos	çreyasām
於	çreyasi	"	çreyaḥsu又は—ssu

女性語基は *ī* を加へて çreyasī となる轉尾は §33 のnadī の例による。

§45. 第七種類三樣語基の轉尾。

—*an*, —*vas*, —*ac* 語基の轉尾。

A. *rājan*, '王' (男), *rājān* (强) *rājan* (中)……これは父音の前には *rāja*, *rājñ* (弱)

主	*rājā*	*rājānau*	*rājānas*
呼	*rājān*	*rājānau*	*rajānas*
對	*rājānam*	*rājānau*	rājñas
具	rājñā	*rāj*abhyām	*rāj*abhis
與	rājñe	"	*rāj*abhyas
奪	rājñas	"	"
屬	"	rājños	rājñām
於	rājñi, rājani	"	rājasu

B. *nāman*, '名' (中), *nāmān* (强) *nāman*, *nāma* (中) *nāmn*(弱)

主、對	*nāma*	nāmanī	nāmāni

呼	*nāma*, *nāman*	nāmanī	*nāmāni*
具	nāmnā	*nāma*bhyām	*nāma*bhis
與	nāmne	"	*nāma*bhyas
奪	nāmnas	"	"
屬	"	nāmnos	nāmnām
於	nāmni, nāmani	"	nāmasu

(注意) *an* が ātman, '自我' (男), yajvan, '祭人' (男) の如き接續父音 (conjunct consonant) の終りの *m* 又は *v* に先きだゝるときは *an* の *a* は凡ての轉尾に保持される。

C. *ātman*, '自我' (男)

主	ātmā	ātmānau	ātmānas
呼	ātman	"	"
對	ātmānam	"	"
具	ātmanā	ātmabhyām	ātmabhis
與	ātmane	"	ātmabhyas
奪	ātmanas	"	"
屬	"	ātmanos	ātmanām
於	ātmani	"	ātmasu

D. *vidvas*, '學識ある, 智ある', *vidvāṁs* (强) *vidvat* (中) *vidus* (弱)

	男	中	男	中	男	中
主	vidvān	vidvat	vidvāṁsau	viduṣī	vidvāṁsas	vidvāṁsi
呼	vidvan	"	"	"	"	"
對	vidvāṁsam	"	"	"	viduṣas	"
具	viduṣā		vidvadbhyām		vidvadbhis	

與	viduṣe	vidvadbhyām	vidvadbhyas
奪	viduṣas	”	”
屬	”	viduṣos	viduṣām
於	viduṣ	”	vidvatsu

Ⓔ—*ac* 語基の轉尾。

prāc, '東方の', *prāñc* (强) *prāc* (中) *prāc* (弱)
pratyac, '西方の' *pratyañc* (强) *pratyac* (中) *pratīc* (弱)
udac, '北方の' *udañc* (强) *udac* (中) *udīc* (弱)

prāc, '東方の' (男)

主、呼	prāṅ	prāñcau	prāñcas
對	prāñcam	”	prācas
具	prācā	prāgbhyām	prāgbhis
與	prāce	”	prāgbhyas
奪	prācas	”	”
屬	”	prācos	prācām
於	prāci	”	prākṣu

女性は prācī, 等で nadī の轉尾の如くする。

中性は主、呼、對、prāk, prācī, prāñci, 等となる。

(註) 上の *vas, ac, an* に終る三樣語基を有つてゐる轉尾の中で强語基の來る場合は男性では單、兩、復の主格と單、兩の對格と兩、復の呼格である。
中性では復數の主、呼、對の三格である。
中語基の來る場合は男性では單數の呼格と父音を以て始むる語尾の前。

中性では單數の主、呼、對の三格と父音を以て始むる語尾の前である、そしてその他の場合は皆弱語基をとる。

XI. 形 容 詞

§46. 梵語の形容詞は語根より直に來る單純形容詞は稀であつて重に名詞より轉化したものが多いそしてその轉尾は名詞のそれと呼應する。

§47. 單純形容詞の語基とその轉尾。

語 基	男、主	女、主	中、主
priya, '愛すべき'	priyas	priyā	priyam
çubha, '美なる'	çubhas	cubhā	çubham
sundara, '好き'	sundaras	sundarā又はsundarī	sundaram
çuci, '清き'	çucis	çucis	çuci
bhīru, '臆病なる'	bhīrus	bhīrus又はbhīrūs	bhīru

§48. 名詞より作られたる形容詞の語基とその轉尾。

語 基	男、主	女、主	中、主
mānuṣa, '人の'	mānuṣas	mānuṣī	mānuṣam
dhārmika, '有道の'	dhārmikas	dhārmikī	dhārmikam
balavat, '力ある'	balavān	balavatī	balavat
çrīmat, '旺盛なる'	çrīmān	çrīmatī	çrīmat
sukhin, '幸福なる'	sukhī	sukhinī	sukhi

§49. 形容詞の比級。

梵語の形容詞の比級に二つの作り方がある。

1. 語基に *tara* を加へて作る。

2. 語基に *īyas* を加へて作る。

puṇya '清淨なる', *puṇyatara*, 'より清淨なる', *balin*, '力ある', *balīyas*, '一層力ある', 等。

§50. 形容詞の優級。

優級も比級と同じく作り方に二つある。

1. 語基に *tama* を加へる。

2. 語基に *iṣṭha* を加へて作る。

puṇyatama, '甚だ清淨なる', *baliṣṭha*, '最も力ある', 等。

（註） 一般に語基に *īyas, iṣṭha* を加ふる前に語基の終りの母音や *in, vin, vat, mat, tṛi* の如き接續字を除き去るものとする。
balin に於ける *in* を去り *bal*+*īyas*, *bal*+*iṣṭha* の如きである。

§51. 斯樣に語尾を除き去る以外に語基に著しき變化を受くるものがある。

例:	代用	比級	優級
antika, '近き'	neda	*nedīyas*	*nediṣṭha*
alpa, '少き'	kana	*kanīyas*	*kaniṣṭha*
kṣipra, '疾く'	kṣepa	*kṣepīyas*	*kṣepiṣṭha*
guru, '重き'	gara	*garīyas*	*gariṣṭha*
dīrgh, '長き'	drāgh	*drāghīyas*	*drāghiṣṭha*

dūra, '遠き'	dava	*davīyas*	*daviṣṭha*
dṛiḍha, '堅固なる'	draḍha	*draḍhīyas*	*draḍhiṣṭha*
praçasya, 'よき'	{çra jyā	*çreyas* *jyāyas*	*çreṣṭha* *yeṣṭha*
priya, '愛すべき'	pra	*preyas*	*preṣṭha*
bahu, '多き'	bahū	*bhūyas*	*bhūyiṣṭha*
yuvan, '少壯の'	yava	*yavīyas*	*yaviṣṭha*
vṛiddha, '老ひたる'	{varṣa jyā	*varṣīyas* *jyāyas*	*varṣiṣṭha* *jyeṣṭha*

XII. 數　　詞

§52. 基　本　數

eka 1; dvi 2; tri 3; catur 4; pañcan 5; ṣaṣ 6; saptan 7; aṣṭan 8; navan 9; daçan 10; ekādaçan 11; dvādaçan 12; tradyodaçan 13; caturdaçan 14; pañcadaçan 15; ṣoḍaçan 16; saptadaçan 17; aṣṭādaçan 18; navadaçan 又は ūnaviṁçati 19; viṁçati 20; ekaviṁçati 21; dvāviṁçati 22; trayoviṁçati 23; caturviṁçati 24; pañcaviṁçati 25; ṣaḍviṁçati 26; saptaviṁçati 27; aṣṭāviṁçati 28; navaviṁçati 又は ūnatriṁçat 29; triṁçat 30; ekatriṁçat 31; dvātriṁçat 32; trayastriṁçat 33; catustriṁçat 34; pañcatriṁçat 35; ṣaṭtriṁçat 36; saptatriṁçat 37; aṣṭātriṁçat 38; navatriṁçat 又は

ūnacatvāriṁçat 39; catvāriṁçat 40; ekacatvāriṁçat 41; dvicatvāriṁçat 又は dvācatvāriṁçat 42; tricatvāriṁçat 又は trayaçcatvāriṁçat 43; catuçcatvāriṁçat 44; pañcacatvāriṁçat 45; ṣaṭcatvāriṁçat 46; saptacatvāriṁçat 47; aṣṭācatvāriṁçat 又は aṣṭacatvāriṁçat 48; navacatvāriṁçat 又は ūnapañcāçat 49; pañcāçat 50; ekapañcāçat 51; dvipañcāçat 又は dvāpañcāçat 52; tripañcāçat 又は trayaḥpañcāçat 53; catuḥpañcāçat 54; pañcapañcāçat 55; ṣaṭpañcāçat 56; saptapañcāçat 57; aṣṭapañcāçat 又は aṣṭāpañcāçat 58; navapañcāçat 又は ūnaṣaṣṭi 59; ṣaṣṭi 60; ekaṣaṣṭi 61; dviṣaṣṭi 又は dvāṣaṣṭi 62; triṣaṣṭi 又は trayaḥṣaṣṭi 63; catuḥṣaṣṭi 64; pañcaṣaṣṭi 65; ṣaṭṣaṣṭi 66; saptaṣaṣṭi 67; aṣṭaṣaṣ'ṭi 又は aṣṭāṣaṣṭi 68; navaṣaṣṭi 又は ūnasaptati 69; saptati 70; ekasaptati 71; dvisaptati 又は dvāsaptati 72; trisaptati 又は trayaḥsaptati 73; catuḥsaptati 74; pañcasaptati 75; ṣaṭsaptati 76; saptasaptati 77; aṣṭasaptati 又は aṣṭāsaptati 78; navasaptati 又は ūnāçīti 79; āçīti 80; ekāçīti 81; dvyaçīti 82; tryaçīti 83; caturaçīti 84; pañcāçīti 85; ṣaḍaçīti 86; saptāçīti 87; aṣṭāçīti 88; navāçīti 又は ūnanavati 89; navati 90; ekanavati 91; dvinavati 又は dvānavati 92; trinavati 又は trayonavati 93; catur-

navati 94; pañcanavati 95; ṣaṇṇavati 96; saptanavati 97; aṣṭanavati 又は aṣṭānavati 98; navanavati 又は ūnaçata 99; çata (中性) 又は ekaçata (中性) 100; sahasra (中性) 又は ekasahasra (中性) 1000.

§53. *eka* の轉尾は中性單數の主、對、兩格に於て *m* の語尾をこる外は下に述ぶる代名詞 *tad* に準じて轉尾する。

§54. *dvi* の轉尾は兩數のみであること言を俟たない。

	男	中、女
主、呼、對	dvau	dve
具、與、奪	dvābhyam	
屬、於	dvayos	

§55. *tri*, *catur* は復數に於て轉尾するこことは亦明白である。

	男	中	女	男	中	女
主、呼	trayas	trīṇi	tisras	catvāras	catvāri	catasras
對	trīn	"	"	caturas	"	"
具	tribhis		tisṛibhis	caturbhis		catasṛibhis
與、奪	tribhyas		tisṛibhyas	caturbhyas		catasṛibhyas
屬	trayāṇām		tisṛiṇām	caturṇām		catasṛiṇām
於	triṣu		tisṛiṣu	caturṣu		catasṛiṣu

§56. *pañcan* より *daçam* に至るまでは復數にのみ轉尾して三性共に同形であるが *aṣṭan* には二樣の轉尾がある。

主、呼、對	pañca	ṣaṭ	aṣṭau	aṣṭa
具	pañcabhis	ṣaḍbhis	aṣṭābhis	aṣṭabhis

與、奪	pañcabhyas	ṣaḍbhyas	aṣṭābhyas	aṣṭabhyas
屬	pañcānām	ṣaṇṇām	aṣṭānām	
於	pañcasu	ṣaṭsu	aṣṭāsu	aṣṭasu

（注意）

1. *saptan, navan, daçan* は *pañcan* と轉尾を同じくする。

2. *viṁçati* の如く i に終るものは §35 の *mati*（智慧）の轉尾に準ずる。

3. *triṁçat* の如く *t* に終るものは一樣語基に準じて轉尾する。

4. *viṁçati* より以上の數詞で形容詞の如く用ゐるときは單數のみに轉尾して名詞とならぶとき性と數とは名詞と必ずしも一致せない只だ同格であれば足る。例へば *viṁçatir naraḥ*（二十人の男子）; *çataṁ naraḥ*（百人の男子）; *triṁçat striyaḥ*（三十人の婦人）; *sahasraṁ striyaḥ*（千人の婦人）。されど名詞の如く用ゐらるゝときは三數を通じて轉尾する。*viṁçatir naraṇām*（男子の二十人）*dve sahasre naraṇām*（男子の二千人）*catvāri çatāni striṇām*（婦人の四百人）等の如きである。

§57. 順　序　數。

parathama 第一; dvitīya 第二; tṛitīya 第三; caturtha 第四; pañcama 第五; ṣaṣṭha 第六; saptama 第七; aṣṭama 第八; navama 第九; daçama 第十; ekādaça 第十一; dvādaça 第十二; trayodaça 第十三; caturdaça 第十四; pañcadaça 第十五; ṣodaça 第十六; saptadaça 第十七; aṣṭādaça 第十八; navadaça 又は ūnaviṁça 第十九。

§58. 二十より以上は *tama* を加へる。

viṁçatitama 第二十; triṁçattama 第三十, 等。又語尾の ti 及び t を除くも同じである。viṁça 第二十; triṁça 第三十, 等。

§59. 順序數の轉尾は *pratha, dvitīya, tṛitīya* は §30 *çiva* の如くする *caturtha* より *daçama* までは男、中の兩性は *çiva* の如く女性は §33 *nadī* の如く轉尾する。

XIII. 代　名　詞

人稱代名詞

§60. 第一人稱語基 *mad*（われ）, *asmad*（われ等）。

主	aham	āvām	vayam
對	mām, mā	āvām, nau	asmān, nas
具	mayā	āvābhyām	asmābhis
與	mahyam, me	āvābhyām, nau	asmabhyam, nas
奪	mat, mattas	āvābhyām	asmat, asmattas
屬	mama, me	āvayos, nau	asmākam, nas
於	mayi	āvayos	asmāsu

§61. 第二人稱語基 *tvad*（汝）*yuṣmad*（汝等）。

主	tvam	yuvām	yūyam
對	tvām	yuvām, vām	yuṣmān, vas
具	tvayā	yuvābhyām	yuṣmābhis
與	tubhyam, te	yuvābhyām, vām	yuṣmabhyam, vas

奪	tva, tvat'as	yuvābhyām	yuṣmat, yuṣmattas
屬	tava, te	yuvayos, vām	yuṣmākam, vas
於	tvayi	yuvayos	yuṣmīsu

§62. 第三人稱語基 *tad*（かれ，かれ等）。

男　性

主	sas（通常sa）	tau	te
對	tam	〃	tān
具	tena	tābhyām	tais
與	tasmai	〃	tebhyas
奪	tasmāt	〃	〃
屬	tasya	tayos	teṣām
於	tasmin	〃	teṣu

女　性

主	sā	te	tās
對	tām	〃	〃
具	tayā	tābhyām	tābhis
與	tasyai	〃	tābhyas
奪	tasyās	〃	〃
屬	〃	tayos	tāsām
於	tasyām	〃	tāsu

中　性

主、對	tat, tad	te	tāni

餘の轉尾は男性の如くする。

§63. 指示代名詞。

指示代名詞は上の tad を（かの，その，この）の意義に用ゐる、されど他に普通に用ゐる指示代名詞があるそれは tad の前に e を添えて etad（この）とするものと idam を語基とする（この）意義を持つものとがある etad はものを近く指し idam の方は汎くこれと示す。

A. *etad*（この）

男　性

主	eṣas（通常eṣa）	etau	ete
對	etam, enam	etau enau	etāu, enām
具	etena, enena	etābhyām	etais
與	etasmai	〃	etebhyas
奪	etasmāt	〃	〃
屬	etasya	etayos, enayos	eteṣām
於	etasmin	〃 〃	eteṣu

女　性

主	eṣā	ete	etās
對	etām, enām	ete, ene	etās, enās
具	etayā, enayā	etābhyām	etābhis
與	etasyai 等。	〃	etābhyas

中性は主 etat, etad; ete; etāni. 對 etat, enat; ete; ene; etāni, enāni, 等。

B. *idam* (この)

男　性

主	ayam	imau	ime
對	imam	”	imān
具	anena	ābhyām	ebhis
與	asmai	”	ebhyas
奪	asmāt	”	”
屬	asya	anayos	eṣām
於	asmin	”	eṣu

女　性

主	iyam	ime	imās
對	imām	”	”
具	anayā	ābhyām	ābhis
與	asyai	”	ābhyas
奪	asyās	”	”
屬	”	anayos	āsām
於	asyām	”	āsu

中　性

主、對	idam	ime	imāni

餘は男性ニ轉尾を同じくする。

又他に單數の主格を除いて稀に用ゐる指示代名詞 *adas* (この, その) がある。

C. *adas* (この, その)

	男	中	女	男中女	男	中	女
主	asau	adas	asau	amū	amī	amūni	amūs
對	amum	”	amūm	”	amūu	”	”
具	amunā		amuyā	amūbhyām	amībhis		amūbhis
與	amuṣmai		amuṣyai	”	amībhyas		amūbhyas
奪	amuṣmāt		amuṣyās	”	”		”
屬	amuṣya		”	amuyos	amīṣām		amūṣām
於	amusmin		amuṣyām	”	amīṣu		amūṣu

§64. 關係代名詞。

關係代名詞は §62 の代名詞 *tad* の首字 *t* を *y* に代へて作る。即ち yad (——するもの, ——あるもの) を語基とする。これは *tad* に準じて轉尾する。

	男	中	女	男	中	女	男	中	女
主	yas	yat	yā	yau	ye	ye	yė	yāni	yās
對	yam	”	yām	”	”	”	yān	”	”
具	yema		yayā	yābhyām			yais		yābhis
與	yasmai		yasyai	”			yebhyas		yābhyas
奪	yasmāt		yasyās	”			”		”
屬	yasya		”	yayos			yeṣām		yāsām
於	yasmin		yasyām	”			yeṣu		yāsu

§65. 疑問代名詞。

疑問代名詞も *tad* の首字 *t* を *k* に代へて作る而して語基

は *kat* の代りに中性單數主格の *kim* に作らるこれも *tad* に準じて轉尾する。

kim (誰)

男	中	女	男	中	女	男	中	女
kas	kim	kā	kau	ke	ke	ke	kāni	kās
kam	”	kām	”	”	”	kān	”	”
kena		kayā	kābhyām			kais		kābhis等。

§66 不定代名詞。

不定代名詞は疑問代名詞 *kim* の轉尾したものに不轉語の *pi, cana, cit* を加へて作る。

男　性

主	kaçcit	kaucit	kecit
對	kañcit	”	kāṁçcit
具	kenacit	kābhyāñcit	kaiçcit
與	kasmacit	”	kebhyaçcit
奪	kasmāccit	”	”
屬	kasyacit	kayoçcit	keṣāñcit
於	kasmiṁçcit	”	keṣucit

女性、主、kācit, kecit, kāçcit, 對、kāñcit, 等。中性、主、對、kiñcit, kecit, kānicit, 等。

api の添付したもの男性主ko'pi kāvapi, ka'pi; 對、kamapi, 等。具、kenāpi, 等。與、kasmāyapi, 等。奪、kasmādapi, 等。

屬、 kasyāpi, 等。於、kasminnapi, 等。

女性、主、kāpi, 等。對、kāmapi, 等。具、kayāpi, 等。

中性主、kimapi, 等。

cana の附加は男性主格 *kaçcana* を除いて稀に見らる。而して中性主格は *kiñcana* である。

§67. 再歸代名詞。

再歸代名詞は凡ての人稱を通じて *sva* を加へ予自身, 汝自身, 彼自身等の代りに立つもので概ね名詞の前部にある。例へば svagṛihaṁ gacchati (彼は彼自身の家に行く) の如きで又 ātman の屬格こその語基が同意義で用ゐらる。 ātmano gṛihaṁ 或は ātma gṛihaṁ gacchati の如きである。

§68. 尊稱代名詞。

bhū の現在分詞 *bhavat* は第二人稱代名詞の尊稱語こして用ゐらる。此の時は §43 の〔註〕3. dhanavat (財ある)の如く轉尾する。

男、主、bhavān, bhavantau, bhavantas; 呼、bhavan;

女、主、bhavatī, bhavatyau, bhavatyas, 等。

例へば *Bhavān gṛihaṁ gacchatu.* (御身は家へ行き玉へ) の如きである。

§69. 形容代名詞。

形容代名詞とは普通の形容詞であつて代名詞の性質を有つてゐるものを云ふのである。*anya*（他の）*itara*（他の，異なる）*katara*（二者の中の孰れか），*tatara*（二者の中のそのもの），*kotama*（多數の中のなにか），*tatama*（多數の中のそのもの）等の如きで *tad* の如く轉尾する。

又數詞，形容詞中原則としては *tad* の如く轉尾するも中性單數の主、對兩格に於ては *m* の語尾をとるものがある。

eka（一の），viçva（都ての），ekatara（二者の一），ubhaya（二者共に）sarva（都ての，一切の）。

sarva（一切の），

男　性

主	sarvas	sarvau	sarve
呼	sarva	”	”
對	sarvam	”	sarvān
具	sarveṇa	sarvābhyām	sarvais
與	sarvasmai	”	sarvebhyas
奪	sarvasmāt	”	”
屬	sarvasya	sarvayos	sarveṣām
於	sarvasmin	”	sarveṣu

女　性

主	sarvā	sarve	sarvās

呼	sarve	sarve	sarvās
對	sarvām	”	”
具	sarvayā	sarvābhyām	sarvābhis
與	sarvasyai	”	sarvābhyas
奪	sarvasyās	”	” 等。

中性　主、對、sarvam, sarve, sarvāṇi; 呼、sarva 等。

第二部　第一編

活　用　法

動詞の相 時稱 法 語尾 數
人稱分詞 獨立於格及び屬格

XIV. 動詞

動詞とは人間又は事物の動作狀態等を表はす詞である。

§70. 動詞の相　梵語動詞の相には次の二つがある。

1. 能相 (kartṛi-vācya) は一文の主語があらはす人或は事物が自ら主となつて或る事をするか又は或る狀態にあるかを示す動詞の相である。

〔例〕 sa puruṣaṁ tudati, '彼は人を打つ'; svapiti, '彼は眠る'

この能相に他動詞自動詞との二種がある。

A. 他動詞とは或る人間又は事物が他の人間又は事物に及ぼす動作を示す。

〔例〕 ahaṁ tām tudāmi, '予は彼女を打つ'

B. 自動詞とは或る人間又は事物が他の人間又は事物に及ばないで只その行爲者（物）に留る動作や狀態を示す。

〔例〕 gacchāmi, '予は往く'; sā svapiti, '彼女は眠る'

2. 所相 (karma-vācya) は一文の主語があらはす人或は事物が或る事を他からしかけられるを示す動詞の相である。

〔例〕 dhanaṁ caureṇa coryate, '財物は盜人によりて偸まる'

§71. 動詞の時稱　梵語動詞の時稱には次の六種がある。

1. 現在. 2. 不完過去（第一過去）. 3. 完過去（第二過去）. 4. 不定過去（第三過去）. 5. 第一未來. 6. 第二未來。

§72. 動詞の法　梵語動詞の法を大別して次の四種とする。

1. 直說法. 2. 可能法. 3. 命令法. 4. 條件法。

法の中にも現在 過去 未來 の三種の時稱があるこの三種の時稱を又六種に小別するされど六種の時を完全に有つてゐるのは直說法のみであるそれ故に時稱を法に配すれば十種に過ぎない。

Indicative 直說法
- 1. 現　在 present tense. (laṭ)
- 2. 不完過去（第一過去）imperfect or first preterite (laṅ)
- 3. 完過去（第二過去）perfect or second preterite (liṭ)
- 4. 不定過去（第三過去）aorist or third preterite (luṅ)
- 5. 第一未來 first future (luṭ)
- 6. 第二未來 second future (luṭ)

可能法 optative or potential { 7. 現　在 (vidhi liṅ)
8. 第三過去 (希求法) (āçīr liṅ)

命令法 Imperative　9. 現　在 (loṭ)

條件法 conditional　10. 過　去 (ṭiṅ)

§73. 直說法とは事物を述べ又は問ふに用ゐる法である。

1. 現在: 現在の動作又は狀態を示す。

〔例〕 corayati, 'かれは偸む'

2. 第一過去: 汎く過ぎざりし時の動作又は狀態を示す。

〔例〕 acorayat, 'かれは偸むだ'

3. 第二過去: 過去に全分完了した動作又は狀態を示す。

〔例〕 carayām-āsa, 'かれは偸むだ'

第一と第二は餘り區別なく用ゐる。

4. 第三過去: 單に過去の動作又は狀態を示す不定の過去で一名歷史的過去とも云はれて古文にその用が多い。

〔例〕 acūcurat, 'かれは偸むだ'

5. 第一未來: 今日にあらずしかも一定の將來に發生する事實を示し普通明日 (çvas) などの語とともに用ゐられる。

〔例〕 carayitā, 'かれは偸むだらう'

6. 第二未來: 今日中に發生すべき事實や將來に早晩發生

すべき事實を示す。

〔例〕 corayiṣyati, 'かれは偸むだらう'

§74. 可能法とは現在又は過去の動作又は狀態が實際に存在せざるも能力又はその他の事情より見て存在し得べきことを示す。

〔例〕 corayet, 'かれは偸むべし'; coryāt, 'かれを偸ましめよ'.——(希求法)

§75. 命令法とは他國語の場合の通り命令又は禁止等を示すに用ゐられる。

〔例〕 corayatu, 'かれをして偸ましめよ'

§76. 條件法とは主賓の動作又は狀態が或る條件によりて定まるときは即ち條件法である。

〔例〕 acorayiṣyat, '……なかりせばかれは偸むだらう'

以上の外に不定法 (infinitive) と云つて人稱 時稱 數などに關係のない動詞の形 corayitum, '偸むべく, 偸むこと' や使役法 (causative) 或ることを爲さしむることを示す動詞の形 corayati, '偸む, 偸ます' や求欲法 (desiderative) 語根のあらはす作用又は狀態を欲することを示す動詞の形 curorayiṣati, 'かれは偸まむと欲す' や强意法 (intensive) 語根のあらはす作用を重復し又は强むることを示す動詞の形 cīcurayati, 'か

れは偸み偸む' や擬名詞法 (verbal adjective and noun) 動詞で形容詞又は名詞の性質を有つことを示す kṛiṣṇāyate, '黑くす'; rājāyati, '王者に擬す' 等の法がある。

§77. 動詞の語尾　これに二種がある。

1. 爲他語尾 (parasmai-pada)—爲他語尾をとるべきもの

2. 爲己語尾 (ātmane-pada)—爲己語尾をとるべきもの

動詞の中で第一のものをとるべきものと第二のものをとるべきものと又同時に二つ共に有つてゐるものがある。

何れの動詞が爲他語尾をもつか又爲己語尾をもつかは慣例によらねばならぬ。

しかしながら所相に活用する動詞は常に爲己語尾をとる。

例へば前に掲げた dhanaṁ caureṇa coryate の語尾 te の如きである。

§78. 動詞の數及び人稱

1. 動詞にも單、兩、復の三數がある。

〔例〕 corayati, 'かれは偸む', corayatas, 'かれ等二人は偸む', coroyanti, '彼等は偸む'。

2. 單數にも兩數にも復數にも各々一人稱, 二人稱, 三人稱と云ふ三つの人稱がある。

〔例〕 corayāmi, '予は偸む', corayasi, '汝は偸む', corayati,

'彼は偸む'。

corayāvas, '予等兩人が偸む', corayathas', '汝等兩人が偸む', corayatas, '彼等兩人が偸む'。

corayāmas, '予等が偸む', corayatha, '汝等が偸む', corayanti, '彼等が偸む'。

§79. 分　詞　これは一種の動詞的形容詞で一部動詞的で一部形容的の性質がある時稱又は相等があるから動詞的で關係する名詞の性, 數, 格に準じて轉尾するから形容的である。これに大別して現在分詞完了分詞未來分詞の三つがある。

1. 現在分詞: 動作又は狀態を繼續してゐるものとして示す。

〔例〕 sa paruṣaṁ vākyaṁ *bruvann* agacchat, 'かれは不親切な言葉を話しながら去つた'。

tena pānthena mahāraṇyaṁ *dahyamānam* avalokitam, 'かの旅客は大なる燃えてゐる森林を見た'。

2. 完了分詞: 動作又は狀態を完了したものとして示す。これに能相所相がある。

〔例〕 sa dhanagrahaṇe yatnaṁ *kritavān*, 'かれは財物を集めるために努力をなした'。(能相)

phalaṁ vṛikṣāt *patitam*, '果實は木よりおこされた'。(所相)

この外に連續體完了不變化分詞こ名けて性，數，格に關係のないものがある。

kṣiptvā, '投げて'; ādāya, 'こりて'; āçritya, '歸依して' 等の形である。

〔例〕 kaver vacanaṁ *çrutvā* rājā hasati, '詩人の言を聞きて王は笑ふ'。

taiḥ *sametya* mantritam, '彼等は共に會して評議をした'。

§80. 獨立於格こ獨立屬格。

二個の動作の主語が相異なるこき獨立於格若くは獨立屬格を用ゐる。

1 獨立於格は於格にある名詞代名詞及び之こ性こ數こ格こに於て一致する形容詞分詞より成る。

〔例〕 udite candramāsi Rāma āgataḥ, '月の上つたこきラーマは來た'.

2. 獨立屬格は屬格の名詞又は代名詞こ形容詞から成る。

〔例〕 paçyato me cauro dhanaṁ corayitvā gṛihād dhā-

vitaḥ, '予が見てゐるにもかゝわらず盜は財物を偸みて家から走つた'。

§81. 未來分詞： 動作又は狀態を未來に豫想するものこして示す。

これに能相所相の形がある。

能相の例：nī, '連れ往く' より neṣyat, '連れ往かむこする'.

dā, '與ふ' より dāsyat, '與へむこする'。

所相の例：neṣyamāna; dāsyamāna, '連れ往かれむこする，與へられむこする'。

この外に所相の意義を有つ義務若しくば能力を示すに用ゐらるる義務未來所相分詞がある。

〔例〕 kiṁ kartavyam?, '何かなさるべきか'。

bālakasya pādau çītalodakena prākṣālanīyau, '子供の足は冷水で洗はるべきである'。

dharmasya nimitte jīvitam api tvājyam, '法のためには生命をも捨てらるべきである'。

§82 活用語尾分類表

現　在

	爲他語尾			爲己語尾		
人稱	單數	兩數	復數	單數	兩數	復數
1.	mi	vas	mas	i e	vahe	mahe
2.	si	thas	tha	se	ithe āthe	dhve
3.	ti	tas	nti anti ati	te	ite āte	nte ate

第一過去（aの加音を要す）

1.	m am	va	ma	i	vahi	mahi
2.	s	tam	te	thās	ithām āthām	dhvam
3.	t又はd	tām	n an us	ta	itām ātām	nta ata

可　能　法

1.	iyam	iva	ima	1.	īya	īvahi	īmahi
2.	is	itam	ita	2.	īthās	īyāthām	īdhvam
3.	it	itām	iyus	3.	īta	īyātām	īran

又は

1.	yām	yāva	yāma
2.	yās	yātam	yāta
3.	yāt	yātām	yus

命　令　法

1.	āni	āva	āma	ai	āvahai	āmahai
2.	— hi dhi	tam	ta	sva	ithām āthām	dhvam
3.	tu	tām	ntu antu atu	tām	itām ātām	ntām atām

第二過去

1.	a	iva	ima	e	ivahe	imahe
2.	itha, tha	athus	a	iṣe	āthe	idhve 又はiḍhve
3.	a	atus	us	e	āte	ire

第一未來

1.	tāsmi	tāsvas	tāsmas	tāhe	tāsvahe	tāsmahe
2.	tāsi	tāsthas	tāstha	tāse	tāsāthe	tādhve
3.	tā	tārau	tāras	tā	tārau	tāras

多くの語根は上の語尾にiを前置す、例 1. itāsmi, 2. itāsi,等

第二未來

1.	syāmi	syāvas	syāmas	sye	syāvahe	syāmahe
2.	syasi	syathas	syatha	syase	syathe	syadhve
3.	syati	syatas	syanti	syate	syete	syante

多くの語根は上の語尾にiを前置す、例 1. iṣyāmi, 2. iṣyasi, 等

第一形態　第三過去（aの加音を要す）

1.	sam	sva	sma	si	svahi	smahi
2.	sīs	stam 又はtam	sta 又はta	sthās	sāthām	dhvam

3.	sīt	stam又はtām	sus	sta又はta	sātām	sata

iを前置した同じ語尾は單數第二、第三人稱に於て首のsを除く。

1.	iṣam	iṣva	iṣma	iṣi	iṣvahi	iṣmahi
2.	īs	iṣṭam	iṣṭa	iṣṭhās	iṣāthām	idhvam
3.	īt	iṣṭām	iṣus	iṣṭa	iṣātām	iṣata

第二形態（第一過去に類似す）

1.	am	āva 又はva	āma 又はma	e又はi	āvahi	āmahi
2.	as又はs	atam 又はtam	ata 又はta	athās	ethām	adhvam
3.	at又はt	atām 又はtām	an 又はus	ata	etām	anta 又はata

可能法　第三過去（希求法）

1.	yāsam	yāsva	yāsma	sīya	sīvahi	sīmahi
2.	yās	yāstam	yāsta	sīṣṭhā	sīyāsthām	sīdhvam
3.	yāt	yāstām	yāsus	sīṣṭa	sīyāstām	sīran

多くの語根は爲己語尾にはi前置すれど爲他語尾には然らず、例 1. iṣīya, 2. iṣīṣṭhās,等。

條件法（aの加音を要す）

1.	syam	syāva	syāma	sye	syāvahi	syāmahi
2.	syas	syatam	syata	syathās	syethām	syadhvam
3.	syat	syātam	syan	syata	syetām	syanta

多くの語根は上の語尾にiを前置す、1. iṣyam, 2. iṣyas, 等。

註：以上掲げた語尾分類表は凡ての動詞（原始 primitive

又は轉來 derivative）に適用せらる。

而してそれ等の語尾が動詞の語基に附加せらる前にその語根は或種の變化を受ける卽ち原始能相動詞の現在語基を作るに十種の法がある。

§83. 原始能相動詞現在語基の十種類。

	語　根	現在語基	語基構成音
第一種	bhū, ‘あり,一ニなる’	*bhava*	a
第二種	ad, ‘食す’	*ad*	なし
第三種	hu, ‘祭る’	*juhu*	なし
第四種	div, ‘博戯す’	*dīvya*	ya
第五種	su, ‘搾る’	*sunu*	nu
第六種	tud, ‘打つ’	*tudi*	a
第七種	rudh, ‘妨ぐ’	*rundh.*	n
第八種	tan, ‘展ばす’	*tanu*	u
第九種	krī, ‘買ふ’	*krīnā*	nā
第十種	cur, ‘偸む’	*corayа*	aya

上にあげた語基の中でaに終るものは第一種第四種第六種第十種で之を一括して第一類動詞ニ名ける。

餘の第二種第三種第五種第七種第八種第九種を第二類動詞ニ名ける。

第二部　第二編　A.

XV. 原始動詞 (primitive verv) 十種活用の能相語基構成の解說

§83に動詞の語根より能相現在語基を作るに十種の方法があることを述べた今それ等を詳說することゝする。

§84. 第一類動詞現在語基。

第一種語基は語根中にある母音を重音にしてaを加へるそのaはmとvとを以て始むる語尾の前にはāと長くなる。aを以て始むる語尾の前には消える。

されど爲他語尾第一過去單數第一人稱の語尾mの前には長くならぬ。

第四種語基は語根にyaを加へるされどm[1]又はvを始めにする語尾の前にはyāとなる而して語根の母音は一般に變化せぬ。

[1] 爲他語尾第一過去單數第一人稱の語尾mの前には然らず。

第六種語基は第一種と同じく語根にaを加へるm[1]とvを始めにする語尾の前にはāとなる而して語根の母音は一般に變化せぬがi, u又はū; ṛi, ṛīに終る語根は普通にそれ等の母

音はiy, uv, riy, 及びirとなる。

〔例〕 ri, '往く' よりriya; nu, '稱讃す' よりnuva; dhū 震動す' よりdhuva; mṛi, '死す' よりmriya; kṛī, '撒く' よりkira; gṛī, '呑む' はgira又はgilaとなる。

父音に終る第六種の語根の多數は父音の前に鼻音を挿入する。

〔例〕 muc, '解く' はmuñca; lip, '塗る' はlimpa; sic, '灌ぐ' はsiñca, 等となる。

次のものは例外であるiṣ, '希求す' はiccha; prach, '問ふ' はpṛiccha; vyac, '欺く' はvica; tṛiṁh, '殺す' はtṛiha, 等となる。

第十種語基は語根にayaを加へるこの時語根の終にある母音は復重音となる。

〔例〕 dhṛi, '持す' はdhāraya となるされどvṛi, '選ぶ' はvaraya となる。

語根の中にある短母音は重音となる。

〔例〕 cur, '偸む' はcoraya となるaがāと長くなることあり。

〔例〕 gras, '嚥下す' はgrāsaya となる。

又語根中にある性質上又は位置上の長母音は變化せぬ。

〔例〕 daṇḍ, '罰す' は daṇḍaya となる。

又語根中にある ṛi も變化せぬ。

〔例〕 spṛih, '望む' は spṛihaya; mṛig, '搜索す' はmṛigaya, 等となる。

されど mṛij, '拭ふ' は復重音 mārjaya となる。

第一過去語基、これは現在語基に a の加音 (augment) を要す。(十種動詞活用表第一類動詞の下を見よ)

可能法語基、これも現在語基と同形である。(十種活用表の下を見よ)

現在分詞語基、爲他語尾 at (ant), 爲己語尾 māna を現在語基に加へて作る。

1.	rohat (强 rohant)	rohamāna
4.	naçyat (" —nt)	naçyamāna
6.	tudat (" —nt)	tudamāua
10.	corayat (" —nt)	corayamāna

即ち動詞の現在第三人稱復數爲他語尾 nti の代りに t, ati 及び anti の代りに at を用ゐる爲己語尾 nte の代りに māna を用ゐる。

§85. 第二類動詞現在語基。

第二類動詞の語基には强弱がある强語基は直設法の現在及

び第一過去に於ける爲他語尾の單數と命令法の爲他爲己兩語尾の第一人稱及び命令法の爲他語尾の單數第三人稱でその他の場合は弱語基を用ゐる。

語尾は第一類動詞の語尾と大略等しきも第一類動詞のethe, ete, ethām, etām は āthe, āte, athām, ātām となる。

又命令法爲他語尾單數第二人稱には dhi 又は hi の加はることがある。

可能法の爲他語尾の前は yā であつて us の語尾の前には ā は消える。

§111. 第二種活用以下を見よ。

第三種は語根を重復にする、即ち d は dh; b は bh; c は k 又は kh; j は g, gh 又は h の代りに立つ又不含氣音が含氣音の代りに代はる。

されど ç, ṣ, s, が語根の始めにありて硬音その次に來る時はその硬音を以て重復音とする。

〔例〕 sthā は tiṣṭha となるが如きである。

語根の母音が長母音ならば短母音之に代はる若し ṛi, ṛī ならば i 又は a を以て之に代ゆ。

dhā は dadhā, tṛī, '渡る' は tatṛī; bhṛi, '扶持す' は bibhṛi となる。

第三種動詞の爲他語尾は anti, antu が ati, atu となる an は us となるこのusの前には語基の母音は重音となる。

§112. の下を見よ。

第五種は語根に nu を加へる父音に終る語根は母音語尾の前には nu の代りに nuv となる。

母音に終る語根は v と m の前には nu の u を除去すそして命令法の語尾 hi も除かる。

〔例〕 ci, '集む' より强 cino 弱 cinu; āp, '得る' より āpno, āpnu 及び āpnuv を得 çru, '聞く' は çri を代用して çriṇo 及び çriṇu を得。

dambh, '欺く'; stambh, '支持す' 等は nu を加へる時その中間の鼻音を除去する dabhnu; stabhnu となる。

§114. の下を見よ。

第七種は强語基の時は na 弱語基の時は n を語根の母音と終りの父音の間に入れる。

〔例〕 bhid, '破壞す' より强 bhinad 弱 bhind; rudh, '防止す' よりruṇadh, rundh, 等を得。

§113. の下を見よ。

第八種は語根に u を加へる强語基は重音 o となり弱語基は u となる。

〔例〕 kṛi, 'なす' より强 karo 弱 kuru を得。

第九種は語根に nā を加へる母音語尾の前には n を加へ父音語尾の前には nī を加ふ。

〔例〕 yu, '結合す' より强 yunā 弱 yun, 及び yunī の語基を得。

grah, '捉ふ' は gṛih となり 强 gṛihṇā 弱 gṛihṇ, gṛihnī を得。

bandh, '縛す'; granth, '編纂す'; manth, '震動す'; çranth, '放つ'; stambh, '鞏固にす' 等は中間の鼻音が除去される bandh より badhnā; badhn, badhnī の語基を得。

又 jñā, '知る' も同樣に鼻音が除かれ jānā, jān, jānī となる。

第二類動詞の現在分詞は爲他語尾の場合には弱語基に at, ant, 爲己語尾の場合には āna を加へて作る。

〔例〕 2.	dviṣat (ant)	dviṣāṇa
3.	juhvat	juhvāna
5.	çriṇvat	çriṇvāna
7.	bhindat (ant)	bhindāna
8.	kurvat (ant)	kurvāṇa
9.	açnat (ant)	açnāna

第二部　第二編 B.

XVI. 轉來動詞 (derivative verb) 能相現在語基

§86. 使役法の語基。

その能相現在語基は原始第十種動詞の現在語基と同じ方法で作る即ち語根に aya を加へる。

而して語根中の母音は重音又は復重音にする語根の終りにある母音は之を復重音にかえる。

〔例〕 vid, '知る' より vedaya, '知らす'; chid, '切る' より chedaya, '切らす' を得。

若し語根の ā に終るものは aya の代りに paya を用ゐる。

〔例〕 dā, '與ふ' より dāpaya, '與へしむ'; sthā, '立つ' より sthāpaya, '立しむ', 等を得。

又或る動詞は不規則な方法で作る。

〔例〕 pā, '飲む' より pāyaya; ruh, '生長す' より ropaya 又は rohaya; ṛi. '往く' より arpaya, 等を得。

§87. 求欲法の語基。

その能相語基は語根を重復して直接又は i を介して sa を

加へて作る。

i を介して sa を加へるものはその語根の母音は重音となる。

第六種動詞の現在語基に準じて活用する。

〔例〕 vid, '知る' より vividiṣati, 'かれは知らむと欲す'; budh, '覺る', より bubodhiṣati, 'かれは覺らんと欲す', 等。

又或る動詞は不規則な方法で作る。

〔例〕 āp, '得' は īpsati; dā, '與ふ' は ditsati; ji, '征服す', は jigīṣati; kṛi, 'なす' は cikīrṣati となる。

§88. 强意法現在語基。

これに二種の方法がある。

1. 單に語根を重復する。

〔例〕 dā, '與ふ' より dādāti, 'かれは與へ與ふ'。

2. 語根の重復したものに ya を加へる。

〔例〕 pac, '煮る' より pāpacyate, '煮又煮る', 等。

§89. 擬名詞現在語基。

これに三種の方法がある。

1. 名詞の語基を語基とする この時は第一種動詞の如く活

用する。

〔例〕 darpaṇa (男), '鏡' は darpaṇati, 'かれは鏡である'。

2. 名詞の語基に ya, aya, āpaya を加へるこの時は第十種動詞の如く活用する。

〔例〕 rājan (男), '王' は rājāyati, 'かれは王に攜す', 等。

3. kāmya, sya, asya を加へるこの時は第四種動詞の如く活用する。

XVII. 現在語基以外の語基構成の解說

§90 第二過去能相語基。

これは語根が父音を以て始まるならば首の父音は母音と共に重復にせらる。

a なる母音は a, ā, ṛi, ṛī, ḷi 又は語根の終りの e, ai, o の代りに; i は i, ī, e; u は u, ū, o; d は dh; p は ph; b は bh; c は k, kh, kṣ; j は g, gh, h, hr; t は sth の代りに重復にせらる。

而してその語基に强、中、弱の三種がある强語基は重音又は復重音の母音を有つてゐる。

中語基は重音弱語基は平音を有つてゐる。

强語基の來るのは爲他語尾第一人稱第三人稱である。

中語基の來るのは爲他語尾第一人稱第二人稱である。

その他の場合は皆弱語基が來る。

〔例〕 gam, '往く'; jagām (强), jagam (中), jagm (弱)

爲 他 語 尾

1.	jagāma, jagama	jagmiva	jagmima
2.	jagamitha, jagantha	jagmathus	jagma
3.	jagāma	jagmatus	jagmus

爲 己 語 尾

1.	jagme	jagmivahe	jagmimahe
2.	jaqmiṣe	jagmāthe	jagmidhve
3.	jagme	jagmāte	jagmire

父音を以て終始する語根で性質上又は位置上の長母音を間に有つてゐるものは第二過去に於て語基は强中弱の別はない。

〔例〕 nind. '叱責す' は ninida; krīḍ. '戲る' は cikrīḍa である。

又中間に i. u, ṛi を有つ語根は强語基のみ重音となる。

〔例〕 bhid. '破る' は bibheda; puṣ. '養ふ' puposa; dṛiç, '見る' は dadarça, 等となる。

されど vid '知る' は重復せぬ。

〔例〕 veda, '予は知つた'; vettha, '汝は知つた'; veda,

'彼は知つた'; vedma, '予等は知つた'; vida, '汝等は知つた'; vidus, '彼等は知つた'。

父音を以て終始する語根でaを中間に有ち語根重復のとき代表音を要せぬものは强中の語基に於てのみ重復して弱語基では a を e に變ずるのみで重復せぬ。

〔例〕 pat, '落つ' は papāta, petima となるが如きである。

ya, va を以て始むる語根は i, u を以て重復する。

〔例〕 yaj, '供養す' は iyāja; vac, '云ふ' は uvāca となる。

母音を以て始むる語根は强語基に於てその母音を復重音となすのみで重復せぬ。

i, u は iy, iv となつて重復する。

〔例〕 as, 'あり' は āsa; āp, '得' は āpa; iṣ, '希求す' は īyeṣa; uṣ, '燃す' は uvoṣa となる。

されど語の始めにある a 及び ṛi は ān を以て重復する。

〔例〕 arc, '耀く' は ānarca となり ṛidh, '增す' は ānardha となる。

語根の終りにある ā 及び復母音の ai, au は强語基には au なる語尾を用ゐる。

弱語基に於ては語尾の始めにある母音の前に消える父音語尾の前には i となる第二人稱單數爲他語尾は ā 又は i となる。

〔例〕 dā, '與ふ' は dadau, daditha(dadātha) dadau; gai, '歌ふ' は jagau, jagitha (jagātha) jagau.

i, ī, u, ū, ṛi, ṛī に終る語根は單數第一人稱爲他語尾には重音或は復重音となり第二人稱は重音第三人稱は復重音となる。

〔例〕 nī, '導く' の第一人稱は ninaya 或は nināya; 第二人稱は ninetha 或は ninayitha; 第三人稱は nināya となる。

弱語基は ṛi で終り二重父音で始まる語根又は ṛī に終るものは重音となる。

〔例〕 krī, '買ふ' は cikriyima; dhū, '拂ふ' は dudhuvima; dhṛi, '持す' は dadhrima; smṛi, '記憶す' は sasmarima; tṛī '渡る' は tatre となる。

第十種動詞及び使役法の第二過去

現在語基に ām を加へ kṛi, bhū, as の第二過去と共に作る。

〔例〕 dṛiç, '見る'。

darçayām-āsa darçayām-āsiva darçayām-āsima
又は
darçayāñ-cakāra

darçayām-āsitha darçayām-āsathus darçayām-āsa

darçayām-āsa darçayām-āsatus darçayām-āsus

第二過去分詞の能相の形

これは第二過去の弱語基に i + vas (爲他) 又第二過去の弱語基に āna (爲己) を加へて作る。

〔例〕 gam, '往く' の弱語基は jagm でそれに直接か又は i を介して vas を加へる jagmvas, jagmivas となる。

又 nī, '連れ往く' の弱語基 ninī + āna = ninyāna となる。又一には第二過去所相分詞に vat (vant) を加へて能相分詞を作る。

〔例〕 kṛita, 'なされたる' より kṛtavat, 'なしたる' を得。

§91. 第三過去能相語基。

これには七つの作り方がある。

初めに語基の前に a の加音を要すされど禁止的命令に使用さるゝときは mā 或は māsma が先きたゝれて a の加音を除く。

例: mā çucaḥ, '哀しむな', 等の如きである。

1. 語根語基、これは語根に直に語尾を加へる而して bhū, 'あり' の語根又は dā, '與ふ' の如き ā に終る動詞にのみ用

るられて大抵爲他語尾をとる。

abhīvam, abhīva, abhīma, 等。§107. の下を見よ。

adām adāva adāma

adās adātam adāta

adāt adātām adus

2. a 語基、これは語根に a も加へこれに語尾を附す。

〔例〕 lip, '塗る' より alip + a = alipa を得。

alipam	alipāva	alipāma	alipe	alipāvahi	alipāmahi
alipas	alipatam	alipata	alipathās	alipethām	alipadhvam
alipat	alipatām	alipan	alipata	alipetām	alipanta

3. 重復語基、この語基は多く第十種動詞及び使役法に用るる而してそれ等の語基の aya を取り去つて作る。

〔例〕 cur, '偸む' の現在語基 coraya の aya を去り cor となし之を重復したる cucor の重復音 u を長くし本來の語根の o を平音とする。

即ち cūcur に a の加音をとり acūcur となし a を附して acū- となる即ち acūcuram, 等。

4. sa 語基、この語基は a, ā 以外の母音を有つて ç, ṣ, h に終る語根にのみ用るる。

〔例〕 diç, '指示す' より adikṣa を得。

adikṣam	adikṣāva	adikṣāma	adikṣi	adikṣāvahi	adikṣāmahi
adikṣas	adikṣatam	adikṣata	adikṣathās	adikṣāthām	adikṣādhvam
adikṣat	adikṣatām	adikṣan	adikṣata	adikṣātām	adikṣanta

5. s 語基、爲他語尾では强語基となり爲己語尾では中又は弱語基となる即ち i, ī u ū に終る語根は重音となり ṛ 又は父音に終る語根は平音となる。

〔例〕 çru 聞く' は açrausam, açroṣi 等;; kṛ; 'なす' は akārṣam, akṛiṣi, 等; bhaj, '分つ' は abhākṣam, abhakṣi, 等。

nī, '導く' 强 anais, 中 anes.

anaiṣam	anaiṣva	anaiṣma	aneṣi	aneṣvahi	aneṣmahi
anaiṣīs	anaiṣṭam	amaiṣṭa	aneṣṭhās	aneṣāthām	aneḍhvam
anaiṣīt	anaiṣṭām	anaiṣus	aneṣṭa	aneṣātām	aneṣata

6. is 語基、爲他語尾では强語基又は中語基となり爲己語尾では中語基又は弱語基となる。

即ち母音に終る語根のときは爲他語尾には復重音となり爲己語尾には重音となる父音に終る語根は爲他語尾には隨意に復重音となる。

〔例〕 lū, '切る' 强 alāvas 弱 alavis.

alāviṣam	alāviṣva	alāviṣma	alaviṣi	alaviṣvahi	alaviṣmahi
alāvīs	alāviṣṭam	alāviṣṭa	alaviṣṭhās	alaviṣāthām	alaviḍhvam
alāvīt	alāviṣṭām	alāviṣus	alaviṣṭa	alaviṣātām	alaviṣata

7. sis 語基、爲他語尾にのみ用ゐらる。

語根の多くは ā に終り又 e, o, ai に終るも sis の附加するときは ā にて終る語根の如くする。

〔例〕 yā, '往く;' ayāsiṣam, ayāsīs, ayāsīt, 等。

glai, '疲勞す'; aglāsiṣam, 等。

可能法能相第三過去（希求法）語基。

これは一名希求法（benedictive）と名けて願望の意義を有つてゐ

爲他語尾の前には yās 爲己語尾の前には sī を語根に加へて作る。この時語根の母音は不規則に或は短母音は長母音に又平音は重音に變り ā は e となる。

〔例〕 bhī, 'あり' より bhīyās, '汝をしてあらしめよ,' bhīyāt, '彼をしてあらしめよ;' dā, '與ふ' より deyās, '汝をして與へしめよ,' deyāt, '彼をして與へしめむ,' deyāstam, '汝等兩人をして與へしめむ,' deyāsus, '彼等をして與へしめむ', 等。

悉しくは十種動詞活用表に就て見るべし。

使役法能相第三過去、この形は使役法の添字の ay を除きて第三過去の語尾を加へる。

〔例〕 budh, '覺る'; ji, '勝つ' の使役法の語基 bodhay;

jāpay より第三過去の語基 abībudh; ajījap を得て abībudham, 等; abībudhe, 等; ajījapam, 等, ajījape, 等となる。

§92. 第一及び第二未來能相語基。

第一未來の語基は動作の作爲者を表示する tṛi 語基の男性の主格 tā と as, 'あり' の直說法現在とを合して作る。

但し第三人稱は as を附加せぬ。

而して第一第二共に凡ての人稱を通じて語根の母音は重音となる。

〔例〕 kṛi, 'なす' より第一未來單數第一人稱第二人稱第三人稱爲他語尾 kar + tā + asmi = kartāsmi, kartāsi, kartā を得。

第二未來の語基は語根に sya 又は isya を加へて作る。

〔例〕 kṛi, 'なす' より kariṣyāmi, kariṣyasi, kariṣyati, 等を得。

未來分詞能相の形。

これは第一類動詞の現在分詞と同じ形を有つてゐる。

	爲他語尾	爲己語尾
kṛi :	kariṣyat (ant)	kariṣyamāna

bhū:	bhaviṣyat (ant)	bhaviṣya—
dā ;	dāsyat (")	dāsya—
nī :	neṣyat (")	neṣya—
なさむとする, 等。		なされむとする, 等。

§92. 不定法語基。

不定法の語基は第一未來の語基に同形で第一未來に i を挿入すべきものはこれにも i を挿入する。

〔例〕 第一種動詞の budh, '覺る' より bodhitum, 第六種動詞の kṣip, '投げる' より kṣeptum を得。

要するに第一未來の第三人稱單數の語尾の終りの ā の代りに um を加へて直に不定法が得られる。

〔例〕 çaktā より çaktum; kathayitā より kathayitum, 等が得れる。

§93. 條件法語基。

條件法は第二未來語基に a の加音を用ゐて語基とする。その語尾は第一過去の語尾と同形である。活用表を見よ。

第二部　第二編 C.

XVIII. 原始十種動詞及び轉來動詞所相語基構成の解說

§94. 十種動詞所相語基。

十種動詞の各々の語根は所相の形を取ることが出來るそれは第四種の爲己語尾の如く活用する。

されど第四種は ya を加へるに當り語根の母音は變化せぬも所相語基は ya を加ふるときは然らず。

〔例〕 第三種 dā, '與ふ' 不定法 dātum, '與へらるべく'。

現在 '予は與へらる,' 等。

dīye	dīyāvahe	dīyāmahe
dīyase	dīyethe	dīyadhve
dīyate	dīyete	dīyante

第一過去 '予は與へられた', 等。(a の加音を要す)

adīye	adīyāvahi	adīyāmahi
adīyathās	adīyethām	adīyadhvam
adīyata	adīyetām	adīyanta

可能法 '予は與へられるかも知れぬ,' 等。

dīyeya	dīyevahi	dīyemahi

dīyethās	dīyeyāthām	dīyedhvam
dīyeta	dīyeyātām	dīyeran

命令法 '予をして與へられしめよ'

dīyai	dīyāyahai	dīyāmahai
dīyasva	dīyethām	dīyadhvam
dīyatām	dīyetām	dīyantām

語根の母音變化。

1. ā に終る六個の語根及び e, ai 及び o に終る一二の語根は ī に變へる。

〔例〕 dā, '與ふ;' de, '保護する;' do, '切る' は dīye, dīyase, dīyate, 等となる。

又 dhā, '置く;' sthā, '立つ;' mā, '量る;' pā, '飲む;' hā '棄つ' も同樣に ī となる。

dhe, '飲む' (三人稱單數 dhīyate, 等。); gai, '歌ふ' gīyate; so '破壞する' sīyate となる。

されど ā に終る他の語根に ā の變化せぬものがある。

〔例〕 khyā, '語る' は khyāyate; jñā, '知る' は jñāyate; pā, '讓る' は pāyate となる。

又 ai 及び o に終る大抵のものは ā となる。

〔例〕 dhyai, '沈思す' は dhyāyate; ço, '鋭くする' は çā-

yate となる。

2. 語根の終りにある ṛi は ri となる若し二重の父音に先き立たるときは重音となる。

〔例〕 kṛi, 'なす' は kriyate; smṛi, '記憶す' は smaryate となる。

3. 語根の終にある ṛī は īr 又 ūr となる。

〔例〕 kṛī, '撒く' は kīryate; pṛī, '滿たす' は pūryate となる。

4. vac, '語る;' vad, '云ふ;' yaj, '供へる' 等は ucya; udya; ijya となる。

§95. 所相現在分詞。

これは現在語基に māna を加へて作る。

〔例〕 tudyamāna, '打たるゝ'; ucyamāna, '語らるゝ' 等。

§96. 所相第二過去語基。

所相第二過去の語基は原始能相第二過去のそれと等しけれども活用は能相の爲己語尾の如くする。

dā, '與ふ'。

dade	dadivahe	dadimahe
dadiṣe	dadāthe	dadidhve

dade	datāte	dadire

所相第二過去分詞語基。 梵語に於て分詞と名くるものが多いその中普通に使用せられるものはこの形である。

この語基は母音に終る語根及び父音に終る大抵の語根に直に ta を加へて作る。

〔例〕 kṣip, '投る' より kṣipta, '投げられたる' を得。

されど語根が ṛī に終る時は na を加へて作る。

〔例〕 kṛī, '撒く' より kīrṇa, '撒れたる' を得。

されど唇音が先き立つときは ṛī は ūr となる。

〔例〕 pṛī, '滿たす' より pūrta 或は pūrṇa を得。

ā, ī 及び ū に終る若干の語根; 二個の父音に先きだゝれ ai に終る若干; d, r 及び j に終る若干 g に終るもの及び c, ch に終る一二の語根はこの分詞を作るに i の挿入を要せぬ又 ta の代りに na を用ゐる。

母音に終る語根は一般にこの分詞に於て i の挿入を要せぬ而して直に語根に ta 又は na を加へる。

〔例〕 pā, '護る' より pāta; çri '歸依す' より çrita; çru, '聞く' より çruta; bhī, 'あり' より bhīta; kṛi, 'なす' より kṛita; ghrā, '嗅ぐ' より ghrāṇa; ḍī, '飛ぶ' より ḍīna; lī, '切る' より lūna dī, '燃える'

より dīta 又は dūna; çvi, '增大する' より çūna を得。

或る語根の終りの母音 ā は ta の前に i に變ず。

〔例〕 sthā, '立つ' より sthita; mā, '計る' より mita; dhā, '置く' より hita.

又 dā, '與ふ' は datta; pā, '飲む' は pīta; hā, '棄つ' は hīna; jyā, '老ひる' は jīna ニ異變する。

又 ā に終る或る語根は na 或は ta の兩方をニる。

ghrā, '嗅ぐ' は ghrāṇa 及び ghrāta; çrā, '料理する' は çrāṇa 及び çrita をニる。

又 dhe, '吸ふ' は dhīta; hve, '呼ぶ' は hīta ve, '縫ふ' は uta; uye, '掩ふ' は vīta 等ニなる。

ai に於ける語根は na 或は ta の前に ā に變する。

〔例〕 mlai, '凋む' より mlāna; dhyai, '沈思す' より dhyāta; dai, '清淨になす' より dāta, 等を得。

o に於ける四五の語根、 so, '殺す' は sita; ço, '鋭くする' は çita 或は çāta; do, '結ぶ' は dita ニなる。

d に終る大抵の語根は ta の代りに na をニり更に na ニ結ぶ。

〔例〕 pad, '行く' より panna; vid, '見出す' より vinna;

nud, '勵ます' より nunna, 等を得。

c 及 j に終る語根は na の前に g に變ぜらる。

〔例〕 naj, '恥づ' より nagna; ruj, '破る' より rugṇa 又は rugna; añc, '動く' より akna, 等を得。

m, n に終る多くの語根は i の挿入なきニき ta の前に鼻音は除去せらる。

〔例〕 gam, '行く' より gata; ram, '樂む' より rata; han, '殺す' より hata; an, '呼吸す' より ānta, 等を得。

gur, '努力する' は gūrṇa. tvar, '急ぐ' は tīrṇa を得。phal, '果實を結ぶ' は phulla ニなる。

§97. 連續體完了不變化分詞。

これは動詞の語根又は語基に直接又は i を介して tvā を加へて作る。

この附加法は完了所相分詞の ta のそれに類似する。

〔例〕 kṣipta. '投られたる' より kṣiptvā, '投げて'; patita '仆れたる' より patitvā を得。

又語根又は語基が接頭辭を有つてゐるニきは tvā の代りに ya が用ゐられる。

されど語根及び語基が短母音に終る時はその母音は長くな

らずして t を挿入する。

〔例〕 ādā, 'こる' より ādāya, 'こりて;' praviç, '入る' より praviçya, '入りて,' āçri, '歸依する' より āçritya, '歸依して,' alaṁkṛi, 'かざる' より alaṁkṛitya を得。

§98. 所相第三過去語基。

原始能相の爲已語尾で語根が母音で終るこき例へば ci, '集む' は ace, acesi, 等こ重音になるも所相第三過去の場合は復重音こなり acāyi acāyiṣi' 等; hu 及び kṛi は原始能相では aho, ahoṣi, 及び akṛi, akṛiṣi, 等こなるもこの場合 ahāvi, ahāviṣi 及び akāri, akāṛiṣi, 等こなる。

假令原始動詞で i の挿入を禁ぜられてゐるものも所相では i の挿入を必要こする。

又語根が ā, 或は ā に變ぜらるべき e, ai. o に終るこき語根の終りの ā こ挿入された i の間に y を入れる。

〔例〕 dā, '與ふ;' de, '護る' dai, '清淨にする', do, '切る' は adāyi, adāyiṣi, 等こなる。

而して所相第三過去に於ては第三人稱單數を除いて原始能相の語基を用ゐることを許す。ci の所相 acāyiṣi にても ace-

ṣi にても取ることを得。

dā, '與ふ,' の第三過去, '予は與へられた,' 等。

adiṣi 又は adāyiṣi	adiṣvahi 又は adāyiṣvahi	adiṣmahi 又は adāyiṣmahi
adithās 又は adāyiṣṭhās	adiṣāthām 又は adāyiṣāthām	adiḍhvam 又は adāyidhvam
adāyi	adiṣātām 又は adāyiṣātām	adiṣata 又は adāyiṣata

§99. 所相可能法第三過去（希求法）こ條件法の語基。

これ等も第三過去の語基の如く母音語基は復重音こなる而して i の挿入を要し母音こ i この間に y を入れる。

〔例〕 ci, '集む' より cāyi, cāyiṣīya; acāyi, acāyiṣye; hu より hāvi 及び ahāvi; kṛi より kāri 及び akāri, 等を得。されこ原始動詞の爲已語尾の形は所相こ同樣に用ゐらる。ceṣīya, aceṣye hoṣīya, ahoṣye, 等。

§100. 所相第一及び第二未來語基。

語根が母音に終るものを除いて原始動詞のそれ等こ同じであるされこ原始動詞に於て i の挿入を禁ぜられてゐるものも所相では i の挿入を要する。

〔例〕 ci, '集む' は原始動詞では cetāhe, 等; ceṣye, 等が

所相では母音が復重音となつて cāyitāhe, 等; cāyiṣye, 等となる。

長母音の ā 或は ā に變ずべき e, ai, o に終る語根は所相では ā と挿入 i との間に y を入れる。

〔例〕 dā, '與ふ' は dāyi の語基となり dāyitāhe, dāyiṣye, 等となる。されど原始動詞の能相語基が所相と同樣に用ゐらる。

即ち ci の能相第一未來 cetāhe, 等と所相第一未來 cāyitāhe, 等とは同樣に用ゐられる。父音に終る語基も同樣である。dā の 所相第一及び第二未來, '予は與へられるだらう',等。

第 一 未 來

dātāhe 又は	dātāsvahe 又は	dātāsmahe 又は
dāyitāhe	dāyitāsvahe	dāyitāsmahe, 等

第 二 未 來

dāsye 又は	dāsyāvahe 又は	dāsyāmahe 又は
dāyiṣye	dāyiṣyāvahe	dāyiṣyāmahe, 等。

§101. 義務未來所相分詞。

1. 原始動詞能相第一未來の第三人稱單數の語尾 tā の代りに tavya を用ゐて作る。

〔例〕 kṣeptā, '彼は投げるだらう' より kṣeptavya, '投げらるべき' を得。

2. 語根の根本母音を重音にしてそれに anīya を加へて作る。

〔例〕 ci, '集む' より cayanīya, '集めらるべき' を得。

3. 語根に ya を加へるこの ya 加へる前に語根の終りの母音の變化を必要とする語根が ā, e, ai o に終るならば e となる。

〔例〕 mā, '量る' は meya; dhai, '沈思する' は dheyeya; glai, '倦む' は gleya; dā, '與ふ'; de, '哀れむ; 及び do, '切る' は deya となる。

又 i, ī, u, ū に語根が終るならばそれ等は重音にせらる。

〔例〕 ci, '集む' は ceya, 等となる。若し ṛi 或は ṛī に語根が終るならば復重音となる。kṛi, 'なす' は kārya.

4. 父音で終り中間に a を有つ語根は復重音にされるされどこれは一概すべきでない。

〔例〕 grah, '捉ふ' より grāhya trap, '恥入る' より trāpya kam, '愛する' より kāmya, 等を得。されど gam, '往く' は gamya; sah, '堪忍す' は sahya となる。

又中間に i 或は u を有つときは一般に重音となる。

〔例〕 bhuj, '食す' は bhojya; lih, '舐る' は lehya となる。

中間に ṛi を有つものは變化せぬ。

〔例〕 dṛiç, '見る' は dṛiçya; sṛij, '解く' は sṛijya となる。

§102. 所相第十種動詞語基。

原始能相第十種動詞は語根に aya を加へて作られたが所相では ya のみを加へて作る。

〔例〕 corayate が coryate となる。

§103. 所相使役法語基。

能相語基の aya が ya となり爲己語尾が加へらる。

〔例〕 pat, '倒る' の能相使役法 pātaya, '倒す' より所相の形 pātya となり第三人稱單數の形 pātyate, 'かれは倒さしめらる'; sthā, '立つ' より sthāpyate, 'かれは立たしめらる'; jñā, '知る' より jñapyate を得。

§104. 所相求欲法語基。

この形は能相求欲法語基の終りの a を除去してそれに ya を加へて作る。

〔例〕 bubodhiṣa より bubodhiṣye, '予は覺らむと欲せらる',等を得。

§105. 所相强意法語基。

所相强意法語基は能相語基の形に ya を加へそれを爲己語尾にする。

〔例〕 totud より totudya+i=totudye, '予は屢々打たる' 等となる。

欠

欠

十種動詞活用の例

§106. 第一類第一種活用。

語根 bhū, 'あり……なる' 不定法 bhavitum, 'あるべく, なること。'

現在, '予はあり, なる' 等。

爲 他 語 尾

人稱	單	兩	復
1.	bhavāmi	bhavāvas	bhavāmas
2.	bhavasi	bhavathas	bhavatha
3.	bhavati	bhavatas	bhavanti

爲 己 語 尾

人稱	單	兩	復
1.	bhave	bhavāvahe	bhavāmahe
2.	bhavase	bhavethe	bhavadhve
3.	bhavate	bhavete	bhavante

第一過去 '予はあつた' 等。(aの加音を要す)

爲 他 語 尾

abhavam	abhavāva	abhavāma
abhavas	abhavatam	abhavata
abhavat	abhavatām	abhavan

爲 己 語 尾

abhave	abhavāvahi	abhavāmahi

abhavathās	abhevethām	abhavadhvam
abhavata	abqavetām	abhavanta

可能法 '予はあるべし' 等。

爲 他 語 尾

bhavēyam	bhavēva	bhavēma
bhaves	bhavetam	bhaveta
bhavet	bhavetām	bhavēyus

爲 己 語 尾

bhaveya	bhavēvahi	bhavēmahi
bhavethās	bhaveyāthām	bhavedhvam
bhaveta	bhaveyātām	bhaveran

命令法 '予をしてあらしめよ' 等。

爲 他 語 尾

bhavāni	bhavāva	bhavāma
bhava	bhavatam	bhavata
bhavatu	bhavatam	bhavantu

爲 己 語 尾

bhavai	bhavāvahai	bhavāmahai
bhavasva	bhavethām	bhavadhvam
bhavatām	bhavetām	bhavantām

第二過去, '予はあつた' 等。

爲 他 語 尾

babhūva	babhūviva	babhūvima

babhūvitha	babhūvathus	babhūva
babhūva	babhūvatus	babhūvus

爲 己 語 尾

babhūve	babhūvivahe	babhūvimahe
babhūviṣe	babhūvāthe	babhūvidhve又は hvē
babhūve	babhūvātē	babhūvire

第一未來, '予はあるだらう' 等。

爲 他 語 尾

bhavitāsmi	bhavitāsvas	bhavitāsmas
bhavitāsi	bhavitāsthas	bhavitāstha
bhavitā	bhavitārau	bhavitāras

爲 己 語 尾

bhavitāhe	bhavitāsvahe	bhavitāsmahe
bhavitāse	bhavitāsāthe	bhavitādhve
bhavitā	bhavitārau	bhavitāras

第二未來, '予はあるだらう' 等。

爲 他 語 尾

bhaviṣyāmi	bhaviṣyāvas	bhaviṣyāmas
bhaviṣyasi	bhaviṣyathas	bhaviṣyatha
bhaviṣyati	bhaviṣyatas	bhaviṣyanti

爲 己 語 尾

bhaviṣye	bhaviṣyāvahe	bhaviṣyāmahe
bhaviṣya e	bhaviṣyathe	bhaviṣyadhve

bhaviṣyate	bhaviṣyete	bhaviṣyante

第三過去，'予はあつた' 等。（aの加音を要す）

爲 他 語 尾

abhūvam	abhūva	abhūma
abhūs	abhūtam	abhūta
abhūt	abhūtām	abhūvan

爲 已 語 尾

abhaviṣi	abhaviṣvahi	abhaviṣmahi
abhaviṣṭhās	abhaviṣāthām	abhavidhvam 又は ḍhvam
abhaviṣṭa	abhaviṣātām	abhaviṣata

可能法第三過去（希求法），'予をしてあらしめよ' 等。

爲 他 語 尾

bhūyāsam	bhūyāsva	bhūyāsma
bhūyās	bhūyāstam	bhūyāsta
bhūyāt	bhūyāstām	bhūyāsuꜜ

爲 已 語 尾

bhaviṣīya	bhaviṣīvahi	bhaviṣīmahi
bhaviṣīṣṭhās	bhaviṣīyāsthām	bhayiṣīdhvem 又は ḍhvam
bhaviṣīṣṭa	bhaviṣīyāstām	bhaviṣīran

條件法，'若し……せば予はあつただらう'（aの加音を要す）

爲 他 語 尾

abhaviṣyam	abhaviṣyāva	abhaviṣyāma

abhaviṣyas	abhaviṣyatam	abhaviṣyata
abhaviṣyat	abhaviṣyatām	abhaviṣyan

爲 已 語 尾

abhaviṣye	abhaviṣyāvahi	abhaviṣyāmahi
abhaviṣyatās	abhaviṣyethām	abhaviṣyadhvam
abhaviṣyata	abhaviṣyetām	abhaviṣyanta

§107. 第一類第四種活用。

語根 muh，'攪亂す，失神す' 不定法 mohitum，'——せらるべく。'

現在 '予は攪亂す' 等。

爲 他 語 尾

muhyāmi	muhyāvas	muhyāmas
muhyasi	muhyathas	muhyatha
muhyati	muhyatas	muhyanti

第一過去，'予は攪亂した'（aの加音を要す）

amuhyam	amuhyāva	amuhyāma
amuhyas	amuhyatam	amuhyata
amuhyat	amuhyatām	amuhyan

可能法，'予は攪亂すべし' 等。

muhyeyam	muhyeva	muhyema
muhyès	muhyetam	muhyeta

muhyet	muhtām	muhyeyus

命令法, '予をして攪亂せしめよ' 等。

muhyāni	muhyāvi	muhyāma
muhya	muhyatam	muhyata
muhyatu	muhyatām	muhyantu

第二過去, '予は攪亂した'等。

mumoha	mumuhiva	mumuhima
mumohitha[1]	mumuhathus	mumuha
mumoha	mumuhatus	mumuhs

第一未來, '予は攪亂するだらう,' 等。

mohitāsmi	mohitāsvas	mohitāsmas
mohitāsi	mohitāsthas	mohitāstha
mohitā	mohitārau	mohitāras

第二未來 同上

mohiṣyāmi	mohisyāvas	mohiṣyāmas
mohiṣyasi	mohiṣyathas	mohiṣyatha
mohiṣyati	mohiṣyatas	mohiṣyanti

第三過去, '予は攪亂した' 等。

amuham	amuhāva	amuhāma
amuhas	amuhatam	amuhata
amuhat	amuhatām	amuhan

可能法第三過去 (希求法) '予をしてあらしめよ' 等。

muhyāsam	muhyāsva	muhyāsma
muhyās	muhyāstam	muhyāsta
muhyāt	muhyāstām	muhyāsus

[1] 又は mumoḍha 或は mumogdha

條件法, '若し……せば予は攪亂しただらう' 等。

amohiṣyam	amohiṣyāva	amohiṣyāma
amohiṣyas	amohiṣyatam	amohiṣyata
amohiṣyat	amohiṣyatām	amohiṣyan

§108. 第一類第六種活用。

語根 sṛij, '作る, 解く, 放つ' 不定法 srasṭum, '解くべく。'

現在 '予は解く' 等。

爲 他 語 尾

sṛijāmi	sṛijāvas	ssijāmas
sṛijasi	sṛijathas	sṛijatha
sṛijati	sṛijatas	sṛijanti

第一過去, '予は解いた' 等。(aの加音を要す)

asṛijam	asṛijāva	asṛijāma
asṛijas	asṛijatam	asṛijata
asṛijat	asṛijatām	asṛijan

可能法, '予は解くべし' 等。

sṛijeyam	sṛijeva	sṛijema
sṛijes	sṛijetam	sṛijeta

sṛiyet	sṛijetām	sṛijeyus

命令法, '予をして解かしめよ' 等。

sṛijāni	sṛijāva	sṛijāma
sṛija	sṛijatam	sṛijata
sṛijatu	sṛijatām	sṛijantu

第二過去, '予は解いた' 等。

sasarja	sasṛijiva	sasṛijima
sasarjitha 又はsasraṣ ha	sasṛijathus	sasṛija
sasarja	sasṛijatus	sasṛijus

第一未來, '予は解くだらう' 等。

srasṭāsmi	srasṭāsvas	srasṭāsmas
srasṭāsi	srasṭāsthas	srasṭāstha
srasṭā	srasṭārau	srasṭāras

第二未來　同上

srakṣyāmi	srakṣyāvas	srakṣyāmas
srakṣyasi	srakṣyathas	srakṣyatha
srakṣyati	srakṣyatas	srakṣyanti

第三過去, '予は解いた' 等。(aの加音を要す)

asrākṣam	asrākṣva	asrakṣma
asrākṣīs	asrāṣṭam	asrāṣṭa
asrākṣīt	asrāṣṭām	asrākṣus

可能法第三過去 (希求法), '予をして解しめよ' 等。

sṛijyāsam	sṛijyāsva	sṛijyāsma
sṛijyās	sṛijyāstam	sṛijyāsta
sṛijyāt	sṛijyāstām	sṛijyāsus

條件法, '若し……せば——予は解くだらう' 等。

(aの加音を要す)

asrakṣyam	asrakṣyāva	asrakṣyāma
asrakṣyas	asrakṣyatam	asrakṣyata
asrakṣyat	asrakṣyatām	asrakṣyan

§109. 第一類第十種活用

語根 cur, '偷む' 不定法 corayitum, '偷むべく'。

現在, '予は偷む' 等。

爲他語尾

corayāmi	corayāvas	corayāmas
corayāsi	corayathas	corayatha
corayati	corayatas	corayanti

爲巳語尾

coraye	corayāvahe	corayāmahe
corayase	corayethe	corayadhve
corayate	corayete	corayante

第一過去, '予は偸むだ' 等。

爲他語尾

acorayam	acorayāva	acorayāma
acorayas	acorayatam	acorayata
acorayat	acorayatām	acorayan

爲 已 語 尾

acoraye	acorayāvahi	acorayāmahi
acorayathās	acorayethām	acorayadhvam
acorayata	acorayetām	acorayanta

可能法, '予は偸むべし' 等。

爲 他 語 尾

corayeyam	corayeva	corayema
corayes	corayetam	corayeta
corayet	corayetām	corayeyus

爲 已 語 尾

corayeya	corayevahi	corayemahi
corayethās	corayeyāthām	corayedhvam
corayeta	corayeyātām	corayeran

命令法, '予をして偸ましめよ' 等。

爲 他 語 尾

corayāṇi	corayāva	corayāma
coraya	corayatam	corayatadhvam
corayatu	corayatām	corayantu

爲 已 語 尾

corayai	corayāvahai	corayāmahai

corayasva	coyayethām	corayadhvam
corayatām	corayetām	corayantām

第二過去, '予は偸むだ' 等。

爲 他 語 尾

corayām—āsa	corayām—āsiva	corayām—āsima
corayām—āsitha	" —āsathus	" —āsa
corayām—āsa	" —āsatus	" —āsus

爲 已 語 尾

corayāñ—cakre	corayāñ—cakṛivahe	corayāñ—cakṛimahe
" —cakṛiṣe	" —cakrāthe	" —cakṛiḍhve
" cakre	" —cakrāte	" —cakrire

第一未來, '予は偸むだらう' 等。

爲 他 語 尾

corayitāsmi	corayitāsvas	corayitāsmas
corayitāsi	corayitāsthas	corayitāstha
corayitā	corayitārau	corayitāras

爲 已 語 尾

corayitāhe	corayitāsvahe	corayitāsmahe
corayitāse	corayitāsāthe	corayitādhve
corayitā	corayitārau	corayitāras

第二未來 同上

爲 他 語 尾

corayiṣyāmi	corayiṣyāvas	corayiṣyāmas

corayiṣyasi	corayiṣyathas	corayiṣyatha
arayiṣyati	corayiṣyatas	corayiṣyanti

爲 已 語 尾

corayiṣye	corayiṣyāvahe	corayiṣyāmahe
corayiṣyase	corayiṣyetha	corayiṣyadhve
corayiṣyate	corayiṣyete	corayiṣyante

第三過去，'予は偸むだ' 等。（aの加音を要す）

爲 他 語 尾

acūcuram	acūcurāva	acūcurāma
acūcuras	acūcuratam	acūcurata
acūcurat	acūcuratam	acūcuran

爲 已 語 尾

acūcure	acūcurāvahi	acūcurāmahi
acūcurathās	acūcurethām	acūcuradhvam
acūcurata	acūcuretām	acūcuranta

可能法第三過去（希求法），'予をして偸ましめよ' 等。

爲 他 語 尾

coryāsam	coryāsva	coryāsma
coryās	coryāstam	coryāsta
coryāt	coryāstām	coryāsus

爲 已 語 尾

corayiṣīya	corayiṣīvahi	corayiṣīmahi

coayiṣīṣṭhās	corayiṣīyāsthām	corayīṣīdhvam
corayiṣīṣṭa	corayiṣīyāstām	corayiṣīran

條件法，'若し……せば予は偸しむだゝらう' 等。

（aの加音を要す）

爲 他 語 尾

acorayiṣyam	acorayiṣyāva	acorayisyāma
acorayiṣyas	acorayiṣyatam	acorayiṣyata
acorayiṣyat	acorayiṣyatām	acorayiṣyan

爲 已 語 尾

acorayiṣye	acorayiṣyāvahi	acorayiṣyāmahi
acorayiṣyathās	acorayiṣyethām	acorayiṣyadhvam
acorayiṣyata	acorayiṣyetām	acorayiṣyanta

§110. 第二類第二種活用。

語根 i，'行く，' 不定法 etum，'行くべく' 强語基 e，弱語基 i.

現在，'予は往く' 爲他語尾　可能法，'予は往くべし' 等。

emi	iva	imas	iyām	iyāva	iyāma
eṣi	ithas	itha	iyās	iyātam	iyāta
eti	itas	yanti	iyāt	iyātām	iyus

第一過去，'予は往つた'。　命令法，'予をして往かしめよ'。

āyam	aiva	aima	ayāni	ayāva	ayāma
ais	aitam	aita	ihi	itam	ita
ait	aitām	āyan	etu	itām	yantu

第二過去 iyāya, iyayitha 又は iyetha, iyāya; īyiva, īyathus, īyatus; īyima, īya, īyus. 第一未來 etāsmi, 等。第二未來 eṣyāmi, 等、第三過去 agām, agās, agāt; agāva agātam, agātām; agāma, agāta, agus, 可能法第三過去 īyāsam, 等。(接頭辭が附加すれば首の ī は短くなる。〔例〕nir—iyāsam, '予は出て往くかも知れぬ') 條件法 aiṣyam, 等。

§111. 第二類第三種活用。

語根 hu, '祭る, 神に供す。' 不定法 hotum, '——べく。' 强 juho, 弱 juhu.

現在, '予は祭る' 等。

爲 他 語 尾

juhomi	juhovas 又は juhvas	juhumas 又は juhmas
juhoṣi	juhuthas	juhutha
juhoti	juhutas	juhvati

第一過去, '予は祭つた' 等。(a の加音を要す)

ajuhavam	ajuhuva	ajuhuma
ajuhos	ajuhutam	ajuhuta
ajuhot	ajuhutām	ajuhavus

可能法, '予は祭るべし' 等。

juhuyām	juhuyāva	juhuyāma
juhuyās	juhuyātam	juhuyāta

juhuyāt	juhuyātām	juhuyus

命令法, '予をして祭らしめよ' 等。

juhavāni	juhavāva	juhavāma
juhudhi	juhutam	juhuta
juhotu	juhutām	juhvatu

第二過去 juhāva, juhavitha 又は juhotha, juhāva; juhuviva, juhuvathus, juhuvatus; juhuvima, juhuva, juhuvus 又は juhavāñ—cakāra, 等。第一未來 hotāsmi, 等。第二未來 hoṣyāmi, 等。第三過去 ahauṣam, ahauṣīs, ahauṣīt; ahauṣva, ahauṣṭam, ahauṣṭām; ahauṣma. ahauṣṭa, ahauṣus, 可能法第三過去 hūyasam. 等。條件法 ahoṣyam, 等。

§112. 第二類第七種活用。

語根 chid, '切斷す'。不定法 chettum, '——べく'。强 chinad, 弱 chind.

現在, '予は切斷す' 等。

爲 他 語 尾

chinadmi	chindvas	chindmas
chinatsi	chinthas(1)	chintha(1)
chinatti	chintas(1)	chindanti

爲 巳 語 尾

chinde	chindvahe	chindmahe

chintse	chindāthe	chindhve
chinte	chindāte	chindate

第一過去（aの加音を要す）

爲他語尾

acchinadam[2]	acchindva	acchindma
acchinat	acchintam[1]	acchinta
acchinat	acchintām[1]	acchindan

爲己語尾

acchindi	acchindvahi	acchindmahi
acchinthās	acchindāthām	acchindhvam
acchinta	acchindātām	acchindata

可能法

爲他語尾

chindyām	chindyāva	chindyāma
chindyās	chindyātam	chindyāta
chindyāt	chindyātām	chindyus

爲己語尾

chindīya	chindīvahi	chindīmahi
chindīthās	chindīyāthām	chindīdhvam
chindīta	chindīyātām	chindīran

命令法

爲他語尾

chinadāni	chinadāva	chinadāma

chindhi[1]	chintam[1]	chinta[1]
chinattu	chintām[1]	chindantu

爲己語尾

chinadai	chinadāvahai	chinadāmahai
chintsva	chindāthām	chindhvam
chintām	chindātām	chindatām

(1) 終尾のdはnと共に連結する時 th, t, dh の前には除去せらる、されど chintthas, chinttas, chinttam, chinddhi, 等は等しく正しきものとす、而して爲己語尾にも亦同じくす

(2) 單純な語に於て二個の母音の間に ch が來る時は c を挿入す。〔例〕aなる母音の從ふ語根 pracha は praccha と書かれねばならぬ。

第二過去爲他語尾 ciccheda, cicchedithа, ciccheda; cicchidiva, cicchidathus, cicchidatus; cicchidima, cicchida, cicchidus. 爲己語尾 cicchide, cicchidiṣe, cicchide; cicchidivahe, cicchidāthe, cicchidāte; cicchimahe, cicchididhve, cicchidire.

爲他語尾第一未來 chettāsmi, 等。爲己語尾 chettāhe, 等。爲他語尾第二未來 chetsyāmi, 等。爲己語尾 chetsye, 等。爲他語尾第三過去 acchidam, acchidas, acchidat; acchidāva, acchidatam, acchidatām; acchidāma, acchidata, acchidan 又は acchaitsam, acchaitsīs, acchaitsīt; acchaitsva, acchaittam, acchaittām; acchaitsma, acchaitta, acchaitsus. 爲己語尾 acchitsi, acchitthās,

acchitta; acchitsvahi, acchitsāthām, acchitsātām; acchitsmahi, acchiddhvam, acchitsata.

§113. 第二類第五種活用。

語根 vṛi, '包む, 遮障す', 不定法 varitum 或は varītum, '——べく'.

現在, '予は包む', 等。强 vṛiṇo, 弱 vṛiṇu.

爲他語尾

vṛiṇomi	vṛiṇuvas 又は vṛiṇvas	vṛiṇumas 又は vṛiṇmas
vṛiṇoṣi	vṛiṇuthas	vṛiṇutha
vṛiṇoti	vṛiṇutas	vṛiṇvanti

爲已語尾

vṛiṇve	vṛiṇuvahe 又は vṛiṇvahe	vṛiṇumahe 又は vṛiṇmahe
vṛiṇuṣe	vṛiṇvāthe	vṛiṇudhve
vṛiṇute	vṛiṇvāte	vṛiṇvate

第一過去（a の加音を要す）

爲他語尾

avṛiṇavam	avṛiṇuva 又は avṛiṇva	avṛiṇuma 又は avṛiṇma
avṛiṇos	avṛiṇutam	avṛiṇuta
avṛiṇot	avṛiṇutām	avṛiṇvan

爲已語尾

avṛiṇvi	avṛiṇuvahi 又は avṛiṇvahi	avṛiṇumahi 又は avṛiṇmahi
avṛiṇuthās	avṛiṇvāthām	avṛiṇudhvam
avṛiṇuta	avṛiṇvātām	avṛiṇvata

可能法

爲他語尾

vṛiṇuyām	vṛiṇuyāva	vṛiṇuyāma
vṛiṇuyās	vṛiṇuyātam	vṛiṇuyāta
vṛiṇuyāt	vṛiṇuyātām	vṛiṇuyus

爲已語尾

vṛiṇvīya	vṛiṇvīvahi	vṛiṇvīmahi
vṛiṇvīthās	vṛiṇvīyāthām	vṛiṇvīdhvam
vṛiṇvīta	vṛiṇvīyātām	vṛiṇvīran

命令法

爲他語尾

vṛiṇavāni	vṛiṇavāva	vṛiṇavāma
vṛiṇu	vṛiṇutam	vṛiṇuta
vṛiṇotu	vṛiṇutām	vṛiṇvantu

爲已語尾

vṛiṇavai	vṛiṇavāvahai	vṛiṇavāmahai
vṛiṇuṣva	vṛiṇvāthām	vṛiṇudhvam
vṛiṇutām	vṛiṇvātām	vṛiṇvatam

第二過去爲他語尾 vavāra, vavaritha, vavāra; vavṛiva, vavrathus, vavratus; vavṛima, vavra, vavṛus, 又は vavarus. 爲已語尾 vavre 又は vavare, vavṛiṣe, vavre 又は vavare; vavṛivahe, vavrāthe, vavrāte; vavṛimahe, vavṛiḍhve, vavrire. 第一未來爲他語尾 varitāsmi 又は varītāsmi, 等。爲已語尾 varitāhe 又は varītāhe, 等。第二未來爲他語尾 variṣyāmi 又は varīṣyāmi, 等。爲已語尾 variṣye 又は varīṣye, 等。第三過去爲他語尾 avāriṣam, avārīs, avārīt; avāriṣva avāriṣṭam, avāriṣṭām; avariṣma, avāriṣṭa, avāriṣus. 爲已語尾 avariṣi, avariṣṭhās, avariṣṭa; avariṣvahi, avariṣāthām, avariṣātām; avariṣmahi, avaridhvam 又は—ṛiḍhvam, avariṣata, 又は avarīṣi, avarīṣṭhās, 等。又は avṛiṣi, avṛithās, avṛita; avṛiṣvahi, avṛiṣāthām, avṛiṣātām; āvṛiṣmahi, avṛiḍhvam, avṛiṣata, 又は avūrṣi, avūrṣṭhās, avūrṣṭa; avūrṣvahi, avūrṣāthām, avūrṣātām; avūrṣmahi, avūrdhvam, avūrṣata.

§114. 第二類第八種活用。

語根 kṛi, 'なす, 作る', 不定法, kartum, 'なすべく'。

現在, '予はなす,' 等。强 karo, 弱 kuru.

爲 他 語 尾

karomi	kurvas[1]	kurmas

karoṣi	kuruthas	kurutha
karoti	kurutas	kurvanti[1]

爲 已 語 尾

kurve	kuruvahe	kurmahe
kuruṣe	kurvāthe	kurudhve
kurute	kurvāte	kurvate

第一過去（aの加音を要す）

爲 他 語 尾

akaravam	akurva	akurma
akaros	akurtam	akuruta
akarot	akurutām	akurvan

爲 己 語 尾

akurvi	akurvahi	akurmahi
akuruthās	akurvāthām	akurudhvam
akuruta	akurvātām	akurvata

(1) v, m 及び y は r の後に二重にせらる。〔例〕kurvvas,等。

可 能 法

爲 他 語 尾

kuryām[1]	kuryāva	kuryāma
kuryās	kuryātam	kuryāta
kuryāt	kuryātām	kuryus

爲 己 語 尾

kurvīya	kurvīvahi	kurvīmahi
kurvīthās	kurvīyāthām	kurvīdhvam
kuvīta	kurvīyātām	kurvīran

命　令　法

爲 他 語 尾

karavāṇi	karavāva	karavāma
kuru	kurutam	kuruta
karotu	kurutām	kuruvantu[1]

爲 己 語 尾

karavai	karavāvahai	karavāmahai
kuruṣva	kurvāthām	kurudhvam
kurutām	kuvātām	kurvatām

第　二　過　去

爲 他 語 尾

cakāra	cakṛiva	cakṛima
cakartha	cakrathus	cakra
cakāra	cakratus	cakrus

爲 己 語 尾

cakre	cakrivahe	cakṛimahe
cakṛiṣe	cakrāthe	cakṛidhvə
cakre	cakrāte	cakrire

第　一　未　來

爲 他 語 尾

kartāsmi	kartāsvas	kartāsmas
kartāsi	kartāsthas	kartāstha
kartā	kartārau	kartāras

爲 己 語 尾

kartāhe	kartāsvahe	kartāsmahe
kartāse	kartāsāthe	kartādhve
kartā	kartārau	kartāras

第　二　未　來

爲 他 語 尾

kariṣyāmi	kariṣyāvas	kariṣyāmas
kariṣyasi	kariṣyathas	kariṣyatha
kariṣyati	kariṣyatas	kariṣyanti

爲 己 語 尾

kariṣye	kariṣyāvahe	kariṣyāmahe
kariṣyase	kariṣyethe	kariṣyadhve
kariṣyate	kariṣyete	kariṣyante

第三過去（aの加音を要す）

爲 他 語 尾

akārṣam	akārṣva	akārṣma
akārṣīs	akārṣṭam	akārṣṭa
akārṣīt	akārṣṭām	akārṣus

爲 己 語 尾

akṛiṣi	akṛiṣvahi	akṛiṣmahi
akṛithās	akṛiṣāthām	akṛiḍhvam
akṛita	akṛiṣātām	akṛiṣata

(1) v, m 及び y は r の後に二重にせらる等 kurvvas, 等。

可能法第三過去（希求法）

爲 他 語 尾

kriyāsam	kriyāsva	kriyāsma
kriyās	kriyāstam	kriyāsta
kriyāt	kriyāstām	kriyāsus

爲 己 語 尾

kṛiṣīya	kṛiṣīvahi	kriṣīmahi
kriṣīṣṭhās	kṛiṣīyāsthām	kṛiṣīdhvam
kriṣīṣṭa	kṛiṣīyāstām	kṛiṣīran

條件法（a の加音を要す）

爲 他 語 尾

akariṣyam	akariṣyāva	akariṣyāma
akariṣyas	akariṣyatam	akariṣyata
akariṣyat	akariṣyatām	akariṣyan

爲 己 語 尾

akariṣye	akariṣyāvahi	akariṣyāmahi
akariṣyathās	akariṣyethām	akariṣyadhvam
akariṣyata	akariṣyatām	akariṣyanta

§115. 第二類第九種活用。

語根 yu, '結合す'。不定法 yavitum, '——すべく'。

現在, '予は結合す'。等。

爲 他 語 尾

yunāmi	yunīvas	yunīmas
yunīsi	yunīthas	yunītha
yunāti	yunītas	yunanti

爲 己 語 尾

yune	yunīvahe	yunīmahe
yunīṣe	yunāthe	yunīdhve
yunīt	yunāte	yunate

第一過去（a の加音を要す）

爲 他 語 尾

ayunām	ayuniva	ayunīma
ayunās	ayunītam	ayunīta
ayunāt	ayunītām	ayunan

爲 己 語 尾

ayuni	ayuyīvahi	ayunīmahi
ayunīthās	ayunāthām	ayunīdhvam
ayunīta	ayunātām	ayunata

可 能 法

爲 他 語 尾

yunīyām	yunīyāva	yunīyāma
yunīyās	yunīyātam	yunīyāta
yunīyāt	yunīyātām	yunīyus

爲己語尾

yunīya	yunīvahi	yunīmahi
yunīthās	yunīyāthām	yunīdhvam
yunīta	yunīyātām	yunīran

命令法

爲他語尾

yunāni	yunāva	yunāma
yunīhi	yunītam	yunīta
yunātu	yunītām	yunantu

爲己語尾

yunai	yunāvahai	yunāmahai
yunīṣva	yunāthām	yunīdhvam
yunītām	yunātām	yunatām

第二過去爲他語尾 yuyāva, yuyavitha 又は yuyotha, yuyāva; yuyuviva, yuyuvathus, yuyavatus; yuyuvima, yuyuva, yuyuvus. 爲已語尾 yuyuve, yuyuviṣe, yuyuve; yuyuvivahe, yuyuvāthe, yuyuvāte; yuyuvimahe, yuyuvidhve 又は ——ḍhve, yuyuvire. 一第一未來爲他語尾 yavitāsmi 又は yotāsmi, 等。爲已語尾 yavitāhe, 等。第二未來爲他語尾 yaviṣyāmi, 等。爲

已語尾 yaviṣye, 等。第三過去爲他語尾 ayāviṣam, —— vīs, ——vīt; ayāviṣva, ——viṣṭam, ——viṣṭām; ayāviṣma, ——viṣṭa, ——viṣus. 爲已語尾 ayaviṣi, ——viṣṭhus, ——viṣṭa; ayaviṣvahi, ayaviṣāthām, ——ṣātām; ayaviṣmahi, ——*vidhvam 又は ——viḍhvam, ——viṣata. 可能法第三過去爲他語尾 yūyāsam, 等。爲已語尾 yaviṣīya, 等。條件法爲他語尾 ayaviṣyam, 等。爲已語尾 ayaviṣye, 等。

第　三　部

復合語(六合釋)接頭辭不轉語

XIX. 復合語（六合釋）

六合釋とは二個以上の語を合せて一語の如くにした複合語(即ち組み合せ語)の性質を六種に分つて釋明することを云ふのである。元來梵語では名詞形容詞代名詞分詞の各々に語尾を加へて性數格の別を示すものであるが時としては二語以上を連結して一語の如くにして最後にのみ語尾を加へて他のものには語尾を略すことがある。そこでその連結された語の性質を明かにせなければその意義を解することができぬ。これがこの釋の起る所以である。例へば王の臣と云へば元より復合語でないからその意義は明瞭であるが王臣と組み合せば王の臣か又は王と臣に讀むかその意義が明瞭でない。そこで六合釋の法で釋明すれば分明になる。下に述ぶる梵語の例を見ればこの釋の用法が解かる。

梵語の復合語は六種に分つことができる。これを古來六合釋と云ふ名目で說明してゐる。

1. 附屬體復合語（依主釋）梵名 Tat-puruṣa, '彼人' 即ち

彼に屬する人。

2. 聚合體復合語（相違釋）梵名 Dvandva,'兩々'即ち對比。

3. 說明又は決定體復合語（持業釋）梵名 Karma-dhārya, '作用を持つもの'。

4. 帶數體復合語（帶數釋）梵名 Dvi-gu, '兩牛'。

5. 副詞又は不變體復合語（隣近釋）梵名 Avyayī-bhāva, '不變の性質'。

6. 關係體復合語（有財釋）梵名 Bahu-vrīhi, '多米' 即ち多くの米を有つ人或は田。

§116. 附屬體復合語（依主釋）。また次の六つに分ける。

A. 對格附屬體、B. 具格附屬體、C. 與格附屬體、D. 奪格附屬體、E. 屬格附屬體、F. 於格附屬體、

A. 對格附屬體、この復合語は前節にある語が後節の語に對して常に對格の關係を有つものである從つて前節は名詞で後節は分詞か語根か或は動作名詞を以て組織せられる。

〔例〕 Svarga-prāptas, ——ptā, ——ptam, '天得' は Svargaṁ prāptas, '天を得たる' の略體である。

B. 具格附屬體、この復合語は前節にある語が後節の語に對して具格の關係を有つてものでこの形は甚だ普通に起るものであるそして前節は大抵實名詞で後節は所相完了分詞で組

織せられる。

〔例〕 Lobha-mohitas, ——tā, ——tam, '貪慾欺かれたるは'は Lobhena mohitas, '貪慾によつて欺かれたるは'の略體である。

C. 與格附屬體、 この復合語は前節にある語が後節の語に對して常に與格の關係を有つもつものである。

〔例〕 Paridhāna-valkalam, '衣服樹皮' は Paridhānāya valkalam, '衣服のための樹皮' の略である。

D. 奪格附屬體、 この復合語は前節にある語が後節の語に對して奪格の關係を有つてゐるものである。

〔例〕 Pitṛi-prāptas, ——pta, ——ptam, '父得たるは' は Pituḥ prāptas, '父より得たるは' の略體である。

E. 屬格附屬體、 この復合語は前節にある語が後節の語に對して常に屬格の關係を有つもので附屬體復合語の中で最も普通のものである而して前後兩節は二個の實名詞から組織されてゐる。

〔例〕 Samudra-tīram, '海岸' は Samudrasya tīram '海の岸' の略體である。

F. 於格附屬體、 この復合語は前節にある語が後節の語に對して常に於格の關係を有つものである。

〔例〕 Paṅka-magnas, ——gnā, ——gnam, '泥沈みたる' は Paṅke magnas, '泥の中に沈みたる' の略體である。

§117. 聚合體復合語（相違釋）。

二個以上の人又は物が共に列擧せらるゝ接續詞でそれ等を連結せずして一つの復合語で云ひ表はす時にこの釋の要がある。

これと附屬體復合語との差異は後節の語が前節に附屬すること否とにある。

之を認めるのは前後の文意より推知せなければならぬ。

〔例〕 Guru-çiçya-sevakās を附屬體復合語と見るときは師の子弟の僕等と云ふ意義になる。

又聚合體とすれば前後には格の關係がないから接續的caのある意味で師と子弟と僕と釋さねばならぬ。

この復合語に三種がある。第一は復數の轉尾をとるもの。第二は兩數の轉尾をとるもの。第三は單數中性の轉尾をとるものである。第一第二は復合語の最後の語基の終りの文字によつて轉尾の種類を定めその性に從つて轉尾する。第三は單數或は復數の名詞が聚合するとき常に單數中性の轉尾をとる。

第一、復數の轉尾をとるもの。

二個以上の名詞が列擧されるとき最後のものは復數の轉尾をとる而してその最後の名詞の性に從ひ轉尾する。

〔例〕 Indrānila-Yamārkāḥ, 'インドラ, アニラ, ヤマ及びアルカ' 即ち Indras, Anilas, Yamas, Arkaçca である。

複合語を組織する若干又は凡ての語が複數の意義を含むものがある。

〔例〕 Brāhmaṇa-Kṣatriya-Vaiçya-Çūdrās, '婆羅門種と刹帝利種と吠舍族と首陀族' と云ふが如きである。

又複數の二個の名詞が列擧されるとき第二位にあるもののみ復數に轉尾する。

〔例〕 Deva-manuṣyās, '諸神と諸人' と云ふが如きである。

第二、兩數の轉尾をとるもの。

單數の二個の名詞が列擧されるとき後のものは兩數の轉尾をとる而して後のものゝ性に從つて轉尾する。

〔例〕 Rāma-Lakṣmaṇau, 'ラーマとラクシュマナ' 即ち Rāmas, Lakṣmaṇaçca; Ārambhāvasāne, 發端と終結' 即ち Ārambhas, Avasāñca; Nadī-parvatau, '山と河' 即ち Nadī-parvataçca の如きである。

第三、單數中性の轉尾をとるもの。

單數又は復數の二個以上の名詞が列擧されるとき最後の語は常に單數中性の轉尾をとる。

〔例〕 Puṣpa-mūla-phalam, '諸華と諸根と諸果實' 即ち Puṣpāni, mūlāni, phalānica, 等の如きである。

§118. 說明又は決定體復合語 (持業釋)。

この復合語は前節の語が形容詞, 分詞, 副詞, 或は同格の名詞で後節の語を說明し、制限し或は決定する。

〔例〕 Sādhu-janas, '善人' 即ちsādhur janas; Kṛiṣṇa-sarpaḥ, '黑蛇' 即ち Kṛiṣṇaḥ sarpaḥ; Saṁskṛitoktis, '典雅なる語' 即ち Saṁskṛitas uktis; sukṛita, 'よくなされしもの' 即ち su-kṛita; samudra-gaṁbhīraḥ, '海の如く深き者' 即ち samudra iva gaṁbhīraḥ.

又形容詞の女性語基は一般に復合語の上に現はれぬ。

〔例〕 Priyā-bhāryā, '愛すべき妻' と云ふべきを Priyabhāryā とする。

§119. 帶數體複合語 (帶數釋)。

この複合語は前節の語が常に數詞である而して復合の最後の語基は ī に終る女性名詞となるか又は中性の單數の轉尾を

こる。

〔例〕 trilokī, '三世'; tridinam, '三日',等。

§120. 副詞又は不變體復合語（隣近釋）。

この復合語の種類は前節が接頭辭（anu, prati, 等）又は副詞（yathā, a 又は an, saha, 等）である。

後節は常に中性の對格の形をこる實名詞である。

〔例〕 Auu-kṣaṇam, '刹那毎に;' pratidinam, '毎日', pratideçam, '各處'; yathā-çraddham, '信心に從つて'; asaṁçayam, '疑惑なく'; Anatikramam, '違背せざること'; sa に縮めらるる Saha こ共に。〔例〕 sakopam, '怒を帶びて'; sādaram, '尊敬を以て'。

§121. 關係體復合語（有財釋）。

上に述べ來つた復合語の多數は實名詞で終つて各々の意義はそれ等復合語の中に完全してゐる。

この復合語は又關係體こして用ゐ他の語の形容語こなる。この時最後の實名詞の語基は形容詞の如く三性に轉尾せらる。

副詞體復合語の upakūlam, '岸近く' が有財釋こして用ゐらるゝこきは上に述べた如く形容する名詞の性に依つて轉尾が違ふここになる。男性轉尾こなつて upakūlo vṛikṣaḥ, '岸に

近き木は'; 女性轉尾こなつて upa-kūlā guhā '岸に近き巖穴は' 中性轉尾こなつて upa-kūlaṁ gṛiham, '岸に近き家は' こなる。

XX. 接　頭　詞

§122. これは語根又は語基の前に置かれてその意義を限定し變更せしめるものである。

1. ati, '越ゆ, 過ぐ' gam, '往く, 去る' は ati-gam, 'すぎゆく'（時なご）。2. adhi '上に, 越ゆ' adhi-gam, '達す, 成就す, 讀書す'。3. anu, '後に, 從ふ' anu-gam, '隨ひ往く'。4. antar, '間に, 中に' antar-gam, '中に往く, 入る'。5. apa, '去る, 分離す' apa-gam, '去る'。6. abhi, '近く, 對す' abhi-gam, '近づく'。7. ava, '離れて, 下へ' ava-gam, '下に往く, 了解す'。8. ā, 'まで, こなたへ' ā-gam, '來る'。9. ut, '上へ（ni の反對）' ut-gam, '上る'。10. upa, '近く, 下に, まで' upa-gam, '近づく'。11. ni, '下に, 中に（ut の反對）' ni-dhā, '下に置く, 卸す'。12. nis, '外に' nir-gam, '出て往く'。13. parā, '逆に, そむける' parā-vṛit, '戻る, 歸り來る'。14. pari, 'めぐりて, 徧く' pari-kṣip, '周匝す, 圍繞す'。15. pra, '前に' pra-kṣip, '前に投ず, 呈す'。prati, '反對に, 戻る' prati-gam, '戻り往く, 歸る'。

vi, '消滅す，分離す' vi-gam, '去る，逝く'。sam, '共に，會合す' sam-gam, '會合す'。

XXI. 不　轉　語

§123. 不轉語の中には接續詞又は副詞を含む。以下のものは最も普通のものである。

punar, 'また，さらに'。api, 'もまた，……なりとも'。sarvadā, sadā, '常に'。ca, '……と……及び'。kutracit, '或る處に'。yathā, '……の如く，……するために，……する樣に。' yāvat, '……する丈け，……する間は'。nūnam, '實に，必定'。ekadā, 'あるとき'。hi, '實に，何となれば'。kintu, tu, parantu, 'されど'。pratyaham, '毎日'。anyatra, '他の處にては'。alam, yatheṣṭam, '充分に'。evam, 'かくの如く'。kadācit, 'あるとき'。sarvatra, '都ての處に'。dūram, '遠く'。atas, 'これより，このときより'。iha, atra, 'こゝに'。katham, kīdṛik, '如何にして'。yadi, cet, 'もし'。no cet, 'もし又然らざれば'。mandam, '徐々として'。eva, klalu, '實に'。ekatra, '一處に，同一の處に'。ekadhā, '一樣に'。dvidhā, '二樣に'。iva, '……の如く，……さながら……の如し'。bhīyas, '一層多き'。bhūyiṣṭha, '最も多き'。prāyas, '大概'。na, 'あらず，……せず'。kiñca, '猶ほまた'。samīpe, '近く'。na jātu, '決して終らず'。tathāpi, 'それにも拘はらず'。mā, '勿れ'。adhunā, idānīm, samprati, '今'。asakṛit, punaḥ punar, '屢々'。sakṛit, ekavāram. '一度'。vā, '或は'。anyathā, '爾らざれば，他の方法にては'。apināma, '思ふに'。sarvathā, '如何にしても'。varam, '寧ろ'。yena, '……する故に，……するために。' yena…… tena……, '……の故に，その故に'。tāvat, 'その間は，暫且'。tathā, iti, evam, īdṛik, 'かくの如く，かくして'。kathamapi, '如何にしても，或る方法にても'。çīghram, '迅速に'。tadā, 'そのときに'。atha, 'かくして，そのとき，これより'。tarhi, 'そのとき'。tatas, 'それより'。tatra, 'そこに'。tasmātparam, 'その後'。adya, '今日'。dvivāram, '二度に'。akasmāt, '不意に'。ūrddhvam, '上方に'。atīva, '比倫なく'。kutas, 'いづこより，何故に'。kutra, 'いつこに'。kutracit, '何處に'。kinartham, '何故に，何のために' 等。

———○———

終

大正十四年五月二十五日印刷
大正十四年六月廿日發行

梵語文法綱要
正價金壹圓八拾錢

著者　京都府伏見町字肥後　阿滿得壽
同
發行者　阿滿得壽
印刷者　京都市岩上通五條北入　伊藤一郎
同
印刷所　一誠堂印刷所

複製不許

發行所　京都府伏見町字肥後　壽竹堂
取次販賣所　京都市三條通麩屋町西　丸善株式會社京都支店

323
614

終